

鋼鉄の咆哮_AZUR BREAKER

Bligh_Drunk

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2つの世界は、歴史的にずれてしまったある筈のない道を辿った

『1つの意思が全てを支配する現世』

『結束した者達が最大の脅威と相對する世界』

一切の繋がりが無い筈だったそれらは、何の因果か交わり混じり合った

鉄の機装の少女達と鋼鉄の悪魔の軍勢

互いの存在を賭け、イカれたゲームは始まった…

!!!ALERT!!!

本作は…

- ・ やたら凝り性が出た独自設定
- ・ 常時META化してる位に不安定なKAN—SEN描写
- ・ セルフ設定流用
- ・ 万能技術IIチート
- ・ まるで成長が分からない文章力が、あります…

抵抗のある方は当域を脱出してください。
それでもいい方は… 総員、戦闘配置ツ!!

目次

Date	Base	
[S]	Weapon date.	A
[S]	Weapon date.	B
[S]	Weapon date.	C
Report.	log	
File.	00	交錯始点
Z	0.	虚空にて
Z	@*??% (#).	破損Date
File.	01	Demon's approaching
A	1.	コネクション
A	2.	幻海に立つ炎
A	3.	実証試験
A	4.	例外資格
A	5.	夢想の果ての鋼獣
A	6.	蒼海、引き裂き
A	7.	獅子か虎か
A	8.	The Steel Beasts
A	9.	吹き荒れし猛威
A	10.	カオス・ロワイアル
		136
		129
		122
		114
		104
		99
		93
		88
		83
		77
		74
		65
		58
		53
		48
		1

—Date—
[S] Weapon date. A

開発区分くくく

日本型：

荒覇吐

天照

播磨

近江

八咫鳥

黄泉

アメリカ型：

ヴァイントシユトース

アルウス

インテゲルタイラント

デュアルクレイター

アルケオプテリクス

マレ・ブラッタ

リフレクト・ブラッタ

シャドウ・ブラッタ

ストレインジ・デルタ

アームドウイング

ノーチラス

リヴァイアサン

ストレインジ・デルタIV

ピン・ブリーカー

イギリス型：

レムレース

ドレットノート

アルティメイトストーム

ヘル・アーチエ

ハボクツク

テュランヌス

センチュリオン

ゾディアック

ドイツ型：

ヴィルベルヴィント

ペーター・シュトラツァー

シュトウルムヴィント

ドーラ・ドルヒ

ヴリルオーデイン

フォーゲル・シユメーラ

スレイプニル

ナハト・シュトラール

グロース・シュトラール

ムスペルヘイム

ヴォルケンクラッツァー

ルフトシュピーゲルング

ブリューナク

ヘイムダル

ソビエト型：

ジュラーヴリク
ソヴィエツキー・ソユーズ

XXX:

ナグルファル

フィンプルヴィンテル

開発データ〜

Sample | DATE

装甲： 速力：平均〜速力 「航空機数」

兵装：

補助兵装：

特性：↓(KAN—SEN特有のスキル扱いではなく、ドリル等の船体に付随する形の特殊性能)

／

※対艦・対空・対潜、想定される各戦闘に対応した兵装に換装

※量産化超兵器性能は、増産数を優先するため元データを基準として下位兵装を適用する

※量産化超兵器構造の簡素化の為、対応データは「オリジンユニット」のみ適用する

／

||

超高速巡洋戦艦 ヴィルベルヴィント (C2)

装甲：対36cm砲防御 速力：70kt〜100kt

兵装：1. 35. 6cm80口径3連装砲

2. 80cm5連装酸素魚雷
3. 80cm5連装誘導魚雷
4. 対艦ミサイル発射機
5. 新型152mm速射砲
6. 対空／対潜ミサイルVLS
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β
6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

特性：特殊超兵器推進装置（速力上昇，機関損傷時、最低70kt以下への速力低下を防止）

超高速巡洋戦艦 シュトウルムヴェイント（C2）

装甲：対41cm砲防御 速力：100kt～180kt

兵装：1. 43.2cm80口径3連装砲

2. 5連装超音速酸素魚雷
3. βレーザ
4. 多弾頭ミサイル発射機
5. 新型152mm速射砲
6. 対空／対潜ミサイルVLS
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β

6. 電波妨害装置 γ
7. 自動消火装置 γ
8. 応急注排水装置 γ

特性：試作強化型超兵器推進装置（速力極大上昇，機関損傷率増加）

超高速巡洋艦 ヴイントシュトース（C1）

装甲：対31cm砲防御 速力：60kt \sim 95kt

兵装：1. 25.4cm80口径3連装砲

2. 68cm5連装酸素魚雷
3. 80cm5連装誘導魚雷
4. 新型巡航ミサイル発射機
5. 新型152mm速射砲
6. 新型パルスレーザー
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 発砲遅延装置 γ
3. 自動装填装置 γ
4. ECMシステム
5. 電磁防壁 β
6. 防御重力場 β
7. 自動消火装置 γ
8. 応急注排水装置 γ

特性：超兵器推進装置（速力上昇）

電波妨害装置 δ （レーダー反応率大幅減少）

超巨大潜水戦艦 ドレットノート（C2）

装甲：対41cm砲防御 速力：40kt \sim 50kt

兵装：1. 38.1cm80口径連装砲

2. 80cm酸素魚雷
3. 100cm酸素魚雷
4. 超音速酸素魚雷

5. 対艦ミサイル発射機
6. 長距離対潜誘導魚雷
7. 多目的ミサイルVLS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β
6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

特性：永久潜航機構

高速浮上

超巨大潜水空母 ドレッドノートII (C3)

装甲：対38cm砲防御 速度：40kt〜55kt 搭載機数：

150

兵装：1. 80cm酸素魚雷

2. 100cm酸素魚雷
3. 超音速酸素魚雷
4. 対艦ミサイル発射機
5. 長距離対潜誘導魚雷
6. 多目的ミサイルVLS
7. 57mmバルカン砲

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 自動装填装置γ
3. ECMシステム
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β
6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ

8. 応急注排水装置 γ

特性：永久潜航機構

可変展開飛行甲板

超巨大空母 アルウス (C1)

装甲：対43cm砲防御 速力：40kt \sim 50kt 搭載機数：

500

兵装：1. 対艦ミサイル発射機

2. 88mm連装バルカン砲

3. 20cm12連装噴進砲

4. 対潜ミサイル発射機

5. 対空ミサイル発射機

6. 57mmバルカン砲

7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 自動装填装置 γ

3. イージシステム

4. 電磁防壁 β

5. 防御重力場 β

6. 電波妨害装置 γ

7. 自動消火装置 γ

8. 応急注排水装置 γ

特性：電波妨害装置 δ (レーダー反応率大幅減少)

大型航空機搭載

特殊装甲甲板 (甲板損傷防止)

超巨大高速空母 アルウスII (C2)

装甲：対43cm砲防御 速力：70kt \sim 90kt 搭載機数：

500

兵装：1. 多弾頭ミサイル発射機

2. 超射程SSM

3. 20cm12連装噴進砲
4. 多弾頭ミサイルVLS
5. 対空／対潜ミサイルVLS
6. 57mmバルカン砲
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 自動装填装置γ
3. イージシステム
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β
6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

特性：試作超兵器推進装置（速力大上昇，舵性能低下）

大型航空機搭載

超巨大高速空母 アルウスⅢ（C3）

装甲：対43cm砲防御 速力：60kt～80kt

搭載機数：

600

兵装：1. 35.6cm80口径3連装砲

2. 254mmAGS砲
3. 対艦ミサイル発射機
4. 超射程SSM
5. 新型152mm速射砲
6. 多目的ミサイルVLS
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β

6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

〔特性：超兵器推進装置（速力上昇）〕

大型航空機搭載

特殊爆撃部隊「ジブラルタルの太陽」

超巨大空母 アルウスIV（2EK）

装甲：対46cm砲防衛 速力：50kt〜60kt 搭載機数：

900

兵装：1. ガスダイナミックレーザー

2. 対艦ミサイルVLS
3. 多弾頭ミサイルVLS
4. 対潜ミサイルVLS
5. 対空ミサイルVLS
6. 多目的ミサイルVLS
7. 新型パルスレーザー

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 自動装填装置γ
3. イービスシステム
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β
6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

特性：後翼飛行甲板

大型航空機搭載

超巨大戦艦 荒覇吐・零（C1）

装甲：対46cm砲防衛 速力：35kt〜50kt

兵装：1. 50.8cm80口径3連装砲

2. 25.4 cm 80口径3連装砲
3. 88 mm連装バルカン砲
4. 20 cm 12連装噴進砲
5. 多目的ミサイル発射機
6. 57 mmバルカン砲
7. 40 mm CIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. ECMシステム
5. 電磁防壁β
6. 防御重力場β
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

特性：電波妨害装置δ（レーダー反応率大幅減少）

補助操舵装置（旋回速度上昇）

超巨大ホバー戦艦 アルティメイトストーム（C3）

装甲：対38 cm砲防御 速度：50 kt / 75 kt

兵装：1. 45.7 cm 80口径連装砲

2. 254 mm AGS砲
3. 対艦ミサイル発射機
4. 多弾頭ミサイル発射機
5. 対空／対潜ミサイルVLS
6. 57 mmバルカン砲
7. 40 mm CIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β

6. 電波妨害装置 γ
 7. 自動消火装置 γ
 8. 応急注排水装置 γ
- 特性：ホバー機構（陸上走行，魚雷無視）

超巨大双胴強襲揚陸艦 デュアルクレイター（C2）

装甲：対46cm砲防御／（艦尾内部）対31cm砲防御 速力：
40kt \sim 55kt 搭載機数：100

兵装：1. 80cm9連装噴進砲

2. 多弾頭9連装噴進砲
3. 38.1cm80口径3連装砲
4. 対潜ミサイルVLS
5. 多目的ミサイルVLS
6. 57mmバルカン砲
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 発砲遅延装置 γ
3. 自動装填装置 γ
4. 電磁防壁 β
5. 防御重力場 β
6. 電波妨害装置 γ
7. 自動消火装置 γ
8. 応急注排水装置 γ

特性：小型艇搭載：魚雷艇（I型），ミサイル艇（II型），レーザー艇（III型）

超高速戦艦 インテゲルタイラント（C3）

装甲：対43cm砲防御 速力：50kt \sim 70kt

兵装：1. 新型280mmAGS砲

2. 新型178mmAGS砲
3. 対艦ミサイルVLS

4. 電子攪乱ミサイルVLS
5. 対空／対潜ミサイルVLS
6. 57mmバルカン砲
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 自動装填装置γ
3. イーゼスシステム

4. 電磁防壁β

5. 防御重力場β

6. 電波妨害装置γ

7. 自動消火装置γ

8. 応急注排水装置γ

特性：超兵器推進装置（速力上昇）

新型ECCMシステム（ロックオン妨害無効化）

超巨大爆撃機 アルケオプテリクス（C2）

装甲：対38cm砲防御 速力：750km/h〜1200km/h

h

兵装：1. 30.5cm80口径連装砲

2. 航空魚雷

3. 焼夷榴弾砲

4. 誘導爆弾

5. 対潜ミサイル

6. 長距離AAM

7. 57mmバルカン砲

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ

3. 自動装填装置γ

4. ECCMシステム

5. 電磁防壁β

6. 防御重力場β

7. 電波妨害装置 γ
 8. 自動消火装置 γ
- 特性：超兵器ブースター（瞬間加速力上昇）

超巨大爆撃機 アルケオプテリクスII（C2）

装甲：対43cm砲防御 速度：900km/h \sim 2000km/h

h

兵装：1. 35.6cm80口径連装砲

2. 305mmガトリング砲

3. 焼夷榴弾砲

4. 誘導爆弾

5. 対潜ミサイル

6. 長距離AAM

7. 57mmバルカン砲

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 発砲遅延装置 γ

3. 自動装填装置 γ

4. ECMシステム

5. 電磁防壁 β

6. 防御重力場 β

7. 電波妨害装置 γ

8. 自動消火装置 γ

特性：超兵器ブースター（瞬間加速力上昇）

超巨大二段空母 ペーター・シュトラッサー（C2）

装甲：対46cm砲防御 速度：40kt \sim 50kt 搭載機数：

350

兵装：1. 45.7cm80口径連装砲

2. 20cm12連装噴進砲

3. 対艦ミサイルVLS

4. 多弾頭ミサイルVLS

5. 多目的ミサイルVLS
6. 57mmバルカン砲
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β
6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

特性：二段甲板（航空機発着速度上昇）

超巨大二段空母 ペーター・シュトラッサーII（C3）

装甲：対51cm砲防御 速度：50kt〜60kt 搭載機数：

350

兵装：1. 拡散荷電粒子砲

2. 新型クリプトンレーザー
3. 新型エレクトロンレーザー
4. 対艦ミサイルVLS
5. 多目的ミサイルVLS
6. 新型パルスレーザー
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 自動装填装置γ
3. 収束強化装置
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β
6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

特性：特殊二段甲板（航空機発着速度上昇，甲板損傷防止）

超巨大高速潜水艦 ノーチラス（C2）

装甲：対36cm砲防御 速度：50kt〜70kt

兵装：1. 80cm酸素魚雷

2. 超音速酸素魚雷

3. 80cm誘導魚雷

4. 音響誘導魚雷

5. 感応機雷敷設魚雷

6. 多弾頭ミサイルVLS

7. 対空／対潜ミサイルVLS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 自動装填装置γ

3. ECMシステム

4. 電磁防壁β

5. 防御重力場β

6. 電波妨害装置γ

7. 自動消火装置γ

8. 応急注排水装置γ

特性：試作潜航超兵器推進装置（潜航中速度大上昇，舵性能低下）

永久潜航機構

超巨大高速潜水艦 ノーチラスII（C2）

装甲：対51cm砲防御 速度：50kt〜65kt

兵装：1. 50.8cm80口径連装砲

2. 80cm誘導魚雷

3. 音響誘導魚雷

4. βレーザー

5. 誘導荷電粒子砲

6. 多弾頭ミサイル発射機

7. 対空／対潜ミサイルVLS

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 発砲遅延装置 γ

3. 自動装填装置 γ

4. 電磁防壁 β

5. 防御重力場 β

6. 電波妨害装置 γ

7. 自動消火装置 γ

8. 応急注排水装置 γ

特性：潜航超兵器推進装置（潜航中速力上昇）

新型ECMシステム（被ロックオン完全無効）

永久潜航機構

高速浮上

超巨大潜水艦 レムレース（C1）

装甲：対46cm砲防御 速力：45kt \sim 50kt

兵装：1. 80cm誘導魚雷

2. 音響誘導魚雷

3. 特殊弾頭誘導魚雷

4. 対艦ミサイルVLS

5. 多弾頭ミサイルVLS

6. 特殊弾頭ミサイルVLS

7. 対空／対潜ミサイルVLS

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 自動装填装置 γ

3. ECMシステム

4. ECMシステム

5. 電磁防壁 β

6. 防御重力場 β

7. 自動消火装置 γ

8. 応急注排水装置 γ

特性：永久潜航機構

電波妨害装置δ（レーダー反応率大幅減少）

超巨大双胴戦艦 播磨（C2）

装甲：対61cm砲防御 速度：45kt〜55kt

兵装：1. 50.8cm80口径3連装砲

2. 25.4cm80口径3連装砲

3. 多弾頭ミサイルVLS

4. 12.7cm80口径高角砲

5. 多目的ミサイルVLS

6. 57mmバルカン砲

7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ

3. 自動装填装置γ

4. 電磁防壁α

5. 防御重力場γ

6. 電波妨害装置γ

7. 自動消火装置γ

8. 応急注排水装置γ

特性：バースト射撃装置（砲系・バルカン系装填速度「1/3」短縮）

超巨大双胴戦艦 播磨II（2EK）

装甲：対61cm砲防御 速度：35kt〜45kt

兵装：1. 61cm80口径3連装砲

2. 28cm80口径3連装砲

3. 超怪力線照射装置

4. 12.7cm80口径高角砲

5. 多目的ミサイルVLS

6. 新型パルスレーザー

7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ

3. 自動装填装置γ

4. 電磁防壁β

5. 防御重力場γ

6. 電波妨害装置γ

7. 自動消火装置γ

8. 応急注排水装置γ

特性：対弾防御装甲（実弾兵器90%防御・展開中、兵装3, 6以外使用不可）

バースト射撃装置（砲系・バルカン系装填速度「1/3」短縮）

超巨大ドリル戦艦 荒覇吐（C2）

装甲：対56cm砲防御 速力：40kt〜55kt

兵装：1. 356mm連装ガトリング砲

2. 怪力線照射装置

3. 新型クリプトンレーザー

4. 対艦ミサイル発射機

5. 多目的ミサイルVLS

6. 57mmバルカン砲

7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 自動装填装置γ

3. ECMシステム

4. 電磁防壁β

5. 防御重力場β

6. 電波妨害装置γ

7. 自動消火装置γ

8. 応急注排水装置γ

特性：艦首ドリル，舷側ソー

超巨大ドリル戦艦 荒覇吐Ⅱ (C3)

装甲：対56cm砲防御 速度：50kt〜60kt

兵装：1. 381mm3連装ガトリング砲

2. 多弾頭噴進砲
3. 多連装誘導魚雷
4. 新型クリプトンレーザー
5. 新型誘導プラズマ砲
6. 多目的ミサイルVLS
7. 57mmバルカン砲

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 自動装填装置γ
3. ECMシステム
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β
6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

特性：艦首ドリル，舷側ソー

艦底武装化（上部：兵装1，2，4，6，7 下部：兵装3，4，5，7）

超巨大ドリル戦艦 天照 (C2)

装甲：対56cm砲防御 速度：45kt〜55kt

兵装：1. 406mm連装ガトリング砲

2. 超怪力線照射装置
3. 新型エレクトロンレーザー
4. 多弾頭ミサイル発射機
5. 多目的ミサイルVLS
6. 57mmバルカン砲
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 自動装填装置γ
 3. ECMシステム
 4. 電磁防壁β
 5. 防御重力場β
 6. 電波妨害装置γ
 7. 自動消火装置γ
 8. 応急注排水装置γ
- 特性：艦首ドリル，舷側ソー

超巨大ドリル戦艦 天照Ⅱ (2EK)

装甲：対61cm砲防御 速度：55kt〜65kt

兵装：1. 61cm80口径3連装砲

2. 超怪力線照射装置
3. 新型誘導プラズマ砲
4. 多弾頭ミサイルVLS
5. 超射程SSM
6. 大型ミサイル
7. 57mmバルカン砲

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β
6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

特性：艦首双型ドリル，舷側ソー

新型ECMシステム(被ロックオン完全無効)

超巨大ステルス戦艦 マレ・ブラッタ (C1)

装甲：対43cm砲防御 速度：45kt〜60kt

兵装：1. 56cm80口径3連装砲

2. 5連装音響誘導魚雷
3. 88mm連装バルカン砲
4. 新型火炎放射砲
5. 対艦ミサイルVLS
6. 多目的ミサイルVLS
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. ECMシステム
5. 電磁防壁β
6. 防御重力場β
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

特性：新型電波妨害装置（レーダー上反応完全隠蔽）

超巨大光学迷彩戦艦 リフレクト・ブラッタ（C2）

装甲：対41cm砲防御 速力：50kt〜60kt

兵装：1. 50.8cm80口径3連装砲

2. 25.4cm80口径3連装砲
3. 新型火炎放射砲
4. 新型エレクトロンレーザー
5. 対艦ミサイルVLS
6. 多目的ミサイルVLS
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β

6. 電波妨害装置 γ
7. 自動消火装置 γ
8. 応急注排水装置 γ

特性：光学迷彩装置（稼働中視認不可・ロックオン不可・光学兵器威力50%減少）

超巨大光学迷彩戦艦 シヤドウ・ブラッタ（C3）

装甲：対41cm砲防御 速度：50kt \sim 65kt

兵装：1. 50.8cm80口径3連装砲

2. 280mmAGS砲
3. 新型火炎放射砲
4. 新型エレクトロンレーザー
5. 多目的ミサイルVLS
6. 対空パルスレーザー
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 発砲遅延装置 γ
3. 自動装填装置 γ
4. 電磁防壁 β
5. 防御重力場 β
6. 電波妨害装置 γ
7. 自動消火装置 γ
8. 応急注排水装置 γ

特性：光学迷彩装置（稼働中視認不可・ロックオン不可・光学兵器威力50%減少）

超巨大列車砲 ドーラ・ドルヒ（G2）

装甲：対61cm砲防御 速度：90km/h \sim 150km/h

兵装：1. 160cm80口径列車砲

2. 80cm80口径連装砲
3. 254mmガトリング砲

4. 152mm速射砲
5. 多目的ミサイルVLS
6. 対空パルスレーザ
7. 57mmバルカン砲

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. 火器管制装置
5. 電磁防壁γ
6. 防御重力場γ
7. 電波妨害装置γ
8. 自動消火装置γ

特性：視界リンク装置（自部隊の視認情報共有，列車砲集弾性上昇）

超巨大爆撃機 ジュラーヴリク（C3）

装甲：対36cm砲防御 速度：450km/h～600km/h
 兵装：1. 356mmガトリング砲

2. 誘導航空魚雷
3. 焼夷榴弾砲
4. 空対艦ミサイル
5. 対潜爆弾
6. 長距離AAM
7. 57mmバルカン砲

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 自動装填装置γ
3. 火器管制装置
4. ECMシステム
5. 電磁防壁β
6. 防御重力場β
7. 電波妨害装置γ
8. 自動消火装置γ

特性：立体機動

超巨大双胴航空戦艦 近江 (C3)

装甲：対51cm砲防衛 速度：40kt〜60kt 搭載機数：
250

兵装：1. 50.8cm80口径3連装砲

2. 46cm80口径3連装砲

3. 超射程SSM

4. 噴進爆雷砲

5. 多目的ミサイルVLS

6. 57mmバルカン砲

7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ

3. 自動装填装置γ

4. 電磁防壁β

5. 防衛重力場β

6. 電波妨害装置γ

7. 自動消火装置γ

8. 応急注排水装置γ

特性：補助操舵装置（旋回速度上昇）

超巨大擬装戦艦 ストレインジ・デルタ (C2)

装甲：対46cm砲防衛 速度：35kt〜55kt

兵装：1. 56cm80口径連装砲

2. 43.2cm80口径連装砲

3. 超音速酸素魚雷

4. 荷電粒子砲

5. 新型拡散プラズマ砲

6. 多目的ミサイル発射機

7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 発砲遅延装置 γ

3. 自動装填装置 γ

4. 電磁防壁 β

5. 防御重力場 β

6. 電波妨害装置 γ

7. 自動消火装置 γ

8. 応急注排水装置 γ

特性：擬装潜航（兵装2，6，7のみ使用可能）

超巨大擬装潜水艦

ストレンジ・デルタII（2EK）

装甲：対46cm砲防御 速力：45kt～55kt

兵装：1. 超音速酸素魚雷

2. 光子魚雷

3. ガスダイナミックレーザー

4. 荷電粒子砲

5. 多弾頭ミサイルVLS

6. 多目的ミサイルVLS

7. 57mmバルカン砲

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 自動装填装置 γ

3. 収束強化装置

4. ECMシステム

5. 電磁防壁 β

6. 防御重力場 β

7. 電波妨害装置 γ

8. 自動消火装置 γ

特性：追加兵装ユニット（ミサイル弾数上昇，切り離して潜航可能，
潜航中兵装3，4，7使用不可）

超巨大要塞艦

ストレンジ・デルタIII（C3）

装甲：対61cm砲防衛 速力：25kt〜35kt 搭載機数：
300

兵装：1. 46cm80口径3連装砲

2. 280mmAGS砲

3. 対艦ミサイル発射機

4. 対潜ミサイルVLS

5. 対空ミサイルVLS

6. 57mmバルカン砲

7. 57mm全方位機関砲

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ

3. 自動装填装置γ

4. 電磁防壁γ

5. 防御重力場γ

6. 電波妨害装置γ

7. 自動消火装置γ

8. 応急注排水装置γ

特性：大型戦艦搭載（改ミシガン級x3）

大型航空機搭載

超巨大装甲戦艦 ストレインジ・デルタIV（NEW）

装甲：対61cm砲防衛 速力：35kt〜60kt

兵装：1. 46cm80口径3連装砲

2. αレーザー

3. 新型エレクトロンレーザー

4. 荷電粒子砲

5. 対潜ミサイルVLS

6. 新型パルスレーザー

7. 57mmバルカン砲

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ

3. 自動装填装置 γ
4. 電磁防壁 γ
5. 防御重力場 α
6. 電波妨害装置 γ
7. 自動消火装置 γ
8. 応急注排水装置 γ

特性：電磁吸収装甲（兵装1, 5, 7のみ使用可能、実弾兵器30%防御／光学兵器完全防御）

装甲切り離し時：全兵装使用可能、受けた光学兵器威力分の自艦光学兵器威力上昇

超高速戦艦 ピン・ブリーカー（NEW）

装甲：対38cm砲防御 速力：60kt \sim 90kt

兵装：1. 254mm3連装ガトリング砲

2. ASROC対潜VLS
3. RAM
4. 対宙レールガン
5. 新型152mm速射砲
6. 新型パルスレーザー
7. 57mm全方位機関砲

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 自動装填装置 γ
3. ECCMシステム
4. 電磁防壁 β
5. 防御重力場 β
6. 電波妨害装置 γ
7. 自動消火装置 γ
8. 応急注排水装置 γ

特性：超兵器推進装置（速力上昇）

補助操舵装置（旋回速度上昇）

スーパージェットシステム（最大同時ロックオン数50, 照準

範囲増加)

超高速巡洋艦 ブリューナク (NEW)

装甲：対31cm砲防御 速度：90kt〜120kt

兵装：1. 280mmAGS砲

2. 5連装超音速酸素魚雷

3. 5連装音響誘導魚雷

4. 5連装特殊弾頭誘導魚雷

5. 5連装対潜誘導魚雷

6. 新型152mm速射砲

7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 自動装填装置γ

3. ECMシステム

4. 電磁防壁β

5. 防御重力場β

6. 電波妨害装置γ

7. 自動消火装置γ

8. 応急注排水装置γ

(特性：超兵器推進装置 (速度上昇)

超巨大高速戦艦 ヘイムダル (NEW)

装甲：対36cm砲防御 速度：90kt〜120kt

兵装：1. 砲塔型レーザガン

2. 280mmAGS砲

3. 焼夷弾頭ミサイルVLS

4. 感応光子機雷

5. 新型152mm速射砲

6. 対空／対潜ミサイルVLS

7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 自動装填装置γ
3. ECMシステム
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β
6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

〔特性：超兵器推進装置（速力上昇）〕

超巨大潜水空母 センチュリオン（NEW）

装甲：対46cm砲防御 速度：35kt〜45kt 搭載機数：

150

兵装：1. 音響誘導魚雷

2. 多連装誘導魚雷
3. 多弾頭誘導魚雷
4. 対艦ミサイルVLS
5. 長距離対潜誘導魚雷
6. 対潜ミサイルVLS
7. 対空ミサイルVLS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 自動装填装置γ
3. ECMシステム
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β
6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

特性：大型航空機搭載

小型艇搭載：I型，II型

永久潜航機構

超巨大戦艦 ゾディアック（NEW）

装甲：対56cm砲防御 速度：40kt〜55kt

兵装：1. 61cm80口径4連装砲

2. 88mm連装バルカン砲

3. 5連装超音速酸素魚雷

4. 荷電粒子砲

5. 巡航ミサイル発射機

6. 多目的ミサイルVLS

7. 57mmバルカン砲

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ

3. 自動装填装置γ

4. 電磁防壁β

5. 防御重力場β

6. 電波妨害装置γ

7. 自動消火装置γ

8. 応急注排水装置γ

特性：新型ECMシステム（被ロックオン完全無効）

新型ECCMシステム（ロックオン妨害無効化）

超巨大双胴巡洋戦艦 八咫鳥（NEW）

装甲：対46cm砲防御 速度：40kt〜55kt

兵装：1. 406mm連装ガトリング砲

2. 88mm連装バルカン砲

3. 焼夷榴弾砲

4. 新型火炎放射砲

5. 巡航ミサイル発射機

6. 焼夷弾頭ミサイルVLS

7. 57mmバルカン砲

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 自動装填装置γ

3. 火器管制装置
4. 電磁防壁 β
5. 防御重力場 β
6. 電波妨害装置 γ
7. 自動消火装置 γ
8. 応急注排水装置 γ

(特性：補助操舵装置(旋回速度上昇))

超巨大双胴空母 黄泉 (NEW)

装甲：対61cm砲防御 速度：35kt〜45kt・ 搭載機数：

800

兵装：1. 怪力線照射装置

2. ガスダイナミックレーザー
3. 焼夷弾頭ミサイルVLS
4. 電子攪乱ミサイルVLS
5. 対潜ミサイルVLS
6. 対空ミサイルVLS
7. 新型パルスレーザー

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 自動装填装置 γ
3. 火器管制装置
4. 電磁防壁 γ
5. 防御重力場 γ
6. 電波妨害装置 γ
7. 自動消火装置 γ
8. 応急注排水装置 γ

(特性：特殊装甲甲板(甲板損傷防止))

補助操舵装置(旋回速度上昇)

光子爆撃部隊「伊邪那岐」

量子爆撃部隊「伊邪那美」

超巨大攻撃機 フォーゲル・シユメーラ (G2)

装甲：対36cm砲防衛 速度：200km/h \sim 500km/h

兵装：1. ホバー砲

2. 254mmAGS砲

3. 254mmガトリング砲

4. 焼夷榴弾砲

5. 対潜爆弾

6. 長距離AAM

7. 57mmバルカン砲

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 自動装填装置 γ

3. 火器管制装置

4. ECMシステム

5. 電磁防壁 β

6. 防御重力場 β

7. 電波妨害装置 γ

8. 自動消火装置 γ

特性：怪力線照射ポッド

立体機動

気候干渉装置 (雷雲)

超巨大高速潜水艦 アームドウイング (C3)

装甲：対41cm砲防衛 速度：50kt \sim 80kt

兵装：1. 多連装魚雷

2. 多連装酸素魚雷

3. 多連装誘導魚雷

4. 超音速酸素魚雷

5. 対艦ミサイルVLS

6. 多弾頭ミサイルVLS

7. 対空／対潜ミサイルVLS

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 自動装填装置γ
 3. ECMシステム
 4. 電磁防壁β
 5. 防御重力場β
 6. 電波妨害装置γ
 7. 自動消火装置γ
 8. 応急注排水装置γ
- 特性：強化潜航超兵器推進装置（潜航中速力大上昇）
- 小型潜水艦搭載
- 永久潜航機構

- 超巨大高速潜水艦 アームドウイングII
- 装甲：対51cm砲防御 速力：70kt～100kt
- 兵装：1. 多連装酸素魚雷
2. 多連装誘導魚雷
 3. 光子魚雷
 4. 量子魚雷
 5. 多弾頭ミサイルVLS
 6. 特殊弾頭ミサイルVLS
 7. 対空／対潜ミサイルVLS

- 補助兵装：1. 新型探信儀δ
2. 自動装填装置γ
 3. ECMシステム
 4. 電磁防壁β
 5. 防御重力場β
 6. 電波妨害装置γ
 7. 自動消火装置γ
 8. 応急注排水装置γ
- 特性：強化潜航超兵器推進装置（潜航中速力大上昇）
- 中型潜水艦搭載
- 永久潜航機構

超巨大未確認飛行物体

ヴリルオーデイン (C2)

装甲：対51cm砲防御 速度：1500km/h \sim 3000km/h

／h

兵装：1. 50.8cm80口径3連装砲

2. リングレーザー
3. 拡散リングレーザー
4. 誘導リングレーザー
5. 対潜ミサイル
6. 新型パルスレーザー
7. 57mmバルカン砲

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 発砲遅延装置 γ
3. 自動装填装置 γ
4. 収束強化装置
5. ECMシステム
6. 電磁防壁 β
7. 電波妨害装置 γ
8. 自動消火装置 γ

特性：超防御重力場（立体可変機動，実弾兵器99%防御）

超巨大地上戦艦 スレイプニル (C3)

装甲：対80cm砲防御 速度：100km/h \sim 200km/h

兵装：1. 100cm80口径連装砲

2. 50.8cm80口径連装砲
3. 長砲身レールガン
4. 誘導荷電粒子砲
5. 多目的ミサイル発射機
6. 対空パルスレーザー
7. 57mmバルカン砲

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. 火器管制装置
5. ECMシステム
6. ECCMシステム
7. 電波妨害装置γ
8. 自動消火装置γ

特性：超重力電磁防壁（実弾／光学兵器を99％防御）

超巨大氷山空母　　ハボクック（C2）

装甲：対51cm砲防御　速力：30kt～45kt　　搭載機数：

700

兵装：1. 56cm80口径3連装砲

2. αレーザ
3. δレーザ
4. 誘導荷電粒子砲
5. 新型パルスレーザ
6. 57mmバルカン砲
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β
6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

特性：氷塊装甲（常時（甲板含む）耐久修復、火災発生時、修復停止／防御30％低下）

大型航空機搭載

気候干渉装置（雪）

超巨大レーザー戦艦 グロース・シユトラール (C2)

装甲：対51cm砲防御 速度：40kt〜55kt

兵装：1. 61cm80口径連装砲

2. αレーザー
3. βレーザー
4. γレーザー
5. 新型プラズマ砲
6. 多目的ミサイルVLS
7. 新型パルスレーザー

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. 電磁防壁γ
5. 防御重力場α
6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

特性：新型収束強化装置（光学兵器威力50%上昇，光学兵器装填速度「1／3」短縮）

超巨大戦艦 ナハト・シユトラール (C1)

装甲：対61cm砲防御 速度：40kt〜60kt

兵装：1. 100cm80口径砲

2. 50.8cm80口径3連装砲
 3. γレーザー
 4. 多目的ミサイルVLS
 5. 新型パルスレーザー
 6. 対空パルスレーザー
 7. 57mmバルカン砲
- 補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置 γ
3. 自動装填装置 γ
4. 電磁防壁 γ

5. 防御重力場 β
6. 電波妨害装置 γ
7. 自動消火装置 γ
8. 応急注排水装置 γ

特性：新型収束強化装置（光学兵器威力50%上昇，光学兵器装填速度「1/3」短縮）

電波妨害装置 δ （レーダー反応率大幅減少）

超巨大航空戦艦 テュランヌス（C1）

装甲：対61cm砲防御 速力：35kt〜50kt 搭載機数：300

兵装：1. 56cm80口径3連装砲

2. α レーザ
3. 新型エレクトロンレーザ
4. 対艦ミサイルVLS
5. 多弾頭ミサイルVLS
6. 新型パルスレーザ
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 発砲遅延装置 γ
3. 自動装填装置 γ
4. 電磁防壁 β
5. 防御重力場 β
6. 電波妨害装置 γ
7. 自動消火装置 γ
8. 応急注排水装置 γ

特性：大型航空機搭載可能

電波妨害装置 δ （レーダー反応率大幅減少）

超巨大航空戦艦 ムスペルハイム (C2)

(シユトラール級戦艦部)

装甲：対51cm砲防御 速力：(連結) 35kt〜50kt (単艦) 45kt〜60kt

兵装：1. 61cm80口径連装砲

2. βレーザー
3. 新型拡散プラズマ砲
4. 重力砲
5. 多目的ミサイルVLS
6. 新型パルスレーザー
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. 電磁防壁γ
5. 防御重力場α
6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

(シユトラッサー級空母部・共通)

装甲：対46cm砲防御 搭載機数：総700

兵装：1. 45.7cm80口径連装砲

2. 20cm12連装噴進砲
3. 対艦ミサイルVLS
4. 多弾頭ミサイルVLS
5. 多目的ミサイルVLS
6. 57mmバルカン砲
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ

3. 自動装填装置γ
 4. 電磁防壁β
 5. 防御重力場β
 6. 電波妨害装置γ
 7. 自動消火装置γ
 8. 応急注排水装置γ
- 特性：新型収束強化装置（光学兵器威力50%上昇，光学兵器装填速度「1／3」短縮）
- 空母部切り離し

超巨大航空戦艦 ムスペルハイムII（C3・C2）

（試作大型戦艦部）

装甲：対56cm砲防御 速力：（連結）40kt〜55kt （単艦）55kt〜70kt

- 兵装：1. 61cm80口径3連装砲
2. 43.2cm80口径連装砲
 3. βレーザー
 4. 新型拡散プラズマ砲
 5. 重力砲
 6. 多目的ミサイルVLS
 7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β
6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

（シユトラツサー級空母部・共通）

装甲：対46cm砲防御・搭載機数：総700

兵装：1. 45. 7cm80口径連装砲

2. 20cm12連装噴進砲

3. 対艦ミサイルVLS

4. 多弾頭ミサイルVLS

5. 多目的ミサイルVLS

6. 57mmバルカン砲

7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 発砲遅延装置 γ

3. 自動装填装置 γ

4. 電磁防壁 β

5. 防御重力場 β

6. 電波妨害装置 γ

7. 自動消火装置 γ

8. 応急注排水装置 γ

特性：空母部切り離し

試作大型超兵器機関（光学兵器威力75%上昇，機関損傷率増

加）

超巨大航空戦艦

ムスペルハイムIII（C3）

（試作大型戦艦部）

装甲：対56cm砲防御 速力：（連結）45kt \sim 60kt（単

艦）55kt \sim 70kt

兵装：1. 61cm80口径3連装砲

2. 43. 2cm80口径連装砲

3. β レーザー

4. 新型拡散プラズマ砲

5. 重力砲

6. 多目的ミサイルVLS

7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 発砲遅延装置 γ
3. 自動装填装置 γ
4. 電磁防壁 β
5. 防御重力場 β
6. 電波妨害装置 γ
7. 自動消火装置 γ
8. 応急注排水装置 γ

(シユトラツサーII型空母部・共通)

装甲：対51cm砲防御 速度：55kt \sim 65kt

搭載機数：

総700

兵装：1. 拡散荷電粒子砲

2. 多弾頭噴進砲
3. 対艦ミサイルVLS
4. 多弾頭ミサイルVLS
5. 多目的ミサイルVLS
6. 57mmバルカン砲
7. 40mmCIWS

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 発砲遅延装置 γ
3. 自動装填装置 γ
4. 電磁防壁 β
5. 防御重力場 β
6. 電波妨害装置 γ
7. 自動消火装置 γ
8. 応急注排水装置 γ

特性：艦体分離稼働

試作大型超兵器機関（光学兵器威力75%上昇，機関損傷率増加）

超巨大水上要塞 ヘル・アーチエ（G2）

装甲：対80cm砲防御 搭載機数：800

兵装：1. 太陽光凝集砲

2. 25.4cm80口径3連装砲

3. 254mmガトリング砲

4. 152mm速射砲

5. 多目的ミサイル発射機

6. 対空パルスレーザー

7. 57mmバルカン砲

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ

3. 自動装填装置γ

4. 火器管制装置

5. 収束強化装置

6. イーゼスシステム

7. 電波妨害装置γ

8. 自動消火装置γ

特性：浮遊集光ミラー（凝集砲充填速度上昇）

超重力電磁防壁（実弾／光学兵器を99%防御）

気候干渉装置（濃霧）

超巨大攻撃衛星 ソヴェイツキー・ソユーズ（C3）

装甲：対61cm砲防御 速度：2000km/h～5000km

h

兵装：1. レールガン

2. 反物質ビーム砲

3. 新型エレクトロンレーザー

4. 誘導荷電粒子砲

5. 新型拡散プラズマ砲

6. 新型誘導プラズマ砲

7. 特殊弾頭爆弾

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 自動装填装置γ

3. 火器管制装置
4. 収束強化装置
5. 電磁防壁 α
6. 防御重力場 α
7. 電波妨害装置 γ
8. 自動消火装置 γ

〔特性：軌道上高速移動〕

〔衛星視界リンク（衛星視界装置搭載対象に観測情報共有）〕

超巨大戦艦

リヴァイアサン（C3）

装甲：対61cm砲防御 速度：65kt〜80kt・搭載機数：

800

兵装：1. 砲塔型レールガン

2. 新型280mmAGS砲
3. レールガンII
4. X線レーザー
5. 多弾頭ミサイルVLS
6. 特殊弾頭ミサイルVLS
7. 新型パルスレーザー

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 自動装填装置 γ
3. イージスシステム
4. 電磁防壁 β
5. 防御重力場 β
6. 電波妨害装置 γ
7. 自動消火装置 γ
8. 応急注排水装置 γ

特性：大型超兵器機関（光学兵器威力50%上昇）

海波振動装置

超巨大戦艦

ヴォルケンクラツター（C2）

装甲：対80cm砲防衛 速力：55kt〜70kt
兵装：1. 80cm80口径連装／3連装砲

2. レールガン
3. 波動砲
4. δレーザー
5. 誘導荷電粒子砲
6. 多目的ミサイルVLS
7. 新型パルスレーザー

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. 電磁防壁β
5. 防御重力場β
6. 電波妨害装置γ
7. 自動消火装置γ
8. 応急注排水装置γ

特性：大型超兵器機関（光学兵器威力50%上昇）

超巨大戦艦 ルフトシュピーゲルング（2EK）

装甲：対80cm砲防衛 速力：60kt〜80kt

兵装：1. 100cm80口径連装／3連装砲

2. レールガン
3. 量子波動砲
4. 反物質ビーム砲
5. εレーザー
6. 多弾頭ミサイルVLS
7. 新型パルスレーザー

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. 電磁防壁γ

5. 防御重力場 γ
6. 電波妨害装置 γ
7. 自動消火装置 γ
8. 応急注排水装置 γ

特性：大型超兵器機関（光学兵器威力50%上昇）

超巨大航空戦艦 ナグルファル（NEW）

（ヴォルケンクラッツァー級戦艦部）

装甲：対80cm砲防御 速度：55kt \sim 70kt

兵装：1. 80cm80口径連装／3連装砲

2. Ω レールガン
3. Ω 重力砲
4. Ω 波動砲
5. ϵ レーザー
6. 特殊弾頭ミサイルVLS
7. 新型パルスレーザー

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 発砲遅延装置 γ
3. 自動装填装置 γ
4. 新型火器管制装置
5. ECMシステム
6. ECMシステム
7. 電磁防壁 γ
8. 防御重力場 γ
9. 自動消火装置 γ
10. 応急注排水装置 γ

（アルウス級空母部・共通）

装甲：対61cm砲防御 搭載機数：総1200

兵装：1. 50.8cm80口径3連装砲

2. 254mmガトリング砲
3. 超射程SSM

4. 焼夷弾頭ミサイルVLS
5. 新型152mm速射砲
6. 新型パルスレーザ
7. 57mmバルカン砲

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 発砲遅延装置γ
3. 自動装填装置γ
4. ECMシステム
5. ECCMシステム
6. 電磁防壁γ
7. 防御重力場γ
8. 自動消火装置γ
9. 応急注排水装置γ

特性：連動出力超兵器機関（光学兵器威力50%上昇，波動兵器充填時間短縮）

超巨大艦 フィンブルヴィンテル（???)

装甲：NO | DATE 速力：NO | DATE

兵装：1. 光子レールガン

2. 光子榴弾砲
3. 反物質ビーム砲
4. 反物質砲
5. δレーザ
6. εレーザ
7. パルスレーザ

補助兵装：NO | DATE

特性：NO | DATE

その他，共通の標準搭載兵装

- ・ 新型電子光学方位盤（電子光学方位盤Ⅱ）
- ・ 急加減速制御装置
- ・ 新型操舵装置
- ・ バウスラストター
- ・ チャフグレネード or 囹魚雷
- ・ 衛星視界装置（ソヴイエツキー・ソユーズ連携用）

[S] Weapon date. B

: 配備兵器状況一覧

従属型戦闘艦

従属型支援艦

スキズブラズニル級

既存型 / (状況に応じて生産型を選別)

[D]	[D]	[D]	[S]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[C]	[C]	[C]	[C]	[C]	[C]	[D]
[D]	[D]	[D]	[S]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[B]	[C]	[C]	[C]	[C]	[C]	[C]	[D]
スヴァローグ	ヘイムダル	ガラム	シーウルフ	アーセナル	ミシガン	ルイジアナ	イリノイ	モンタナ	エマーソン	富士	天城	尾張	紀伊	加賀	千鶴	信濃	伊吹	超球磨	大月						

- [C A] ブリーギット
- [C A] ゲイ・ボルグ
- [B B] インコンパラブル
- [B B] インヴェインシブル
- [B B] セント・アンドリユー
- [B C] ライオン
- [C A] グングニル
- [C A] カイテル
- [C A] グスタフ
- [C A] ヴァジユラ
- [B B] サラミス
- [B B] マッケンゼン
- [B B] H 4 4
- [B B] H 5 1
- [B B] シュバルツ・ゾンターク
- [S S] アルミランテ・ストルニ
- [D D] メツサーフェリー
- [B B] レイガナーズ
- [C A] アノマロカリス
- [C A] ナハト
- [B B] ラインバリー
- [D D] ブルーゲイル

…
…

(METAL SLUG)

- [V C] S V | 0 0 1 シリーズ / (配備可能)
- [T A] メタルクロウ / (配備可能)
- [V C] S V | 0 0 1 III ブラックハウンド / (配備可能)
- [V C] スラグガンナー / (配備可能)

- [FM] アオゲンシユテルン / (配備可能)
- [MM] スラグアーマー / (配備可能)
- [TA] ギリダ・O型 / (配備中)
- [TA] ジイ・コツカ型 / (配備中)
- [BH] R・ショーブ型 / (配備可能)
- [TA] メルテイ・ハニー型 / (配備中)
- [TA] ブル・チャン型 / (配備中)
- [TA] アイアン・イソ型 / (配備中)
- [TA] サルビア型 / (配備中)
- [AH] MH-6s マクスネル型 / (配備中)
- [MT] M-15A ブラッドレー型 / (配備中)
- [VC] MV-280B ヘビイ・B / (配備中)
- [VC] MV-280C / (配備中)
- [SM] ウォールドローン / (配備中)
- [F/A] ヘアバスター・リバーツ / (配備可能)
- [TA] 谷王 / (配備中)
- [TA] シュー／カーン / (配備中)
- [VC] アイアン・ノカーナ / (配備中)
- [AH] ハイ・ドウ / (配備可能)
- [F/B] ザ・キーシII / (配備可能)
- [MM] アツシ・NERO / (配備可能)
- [TA] ドラゴン・ノスケ / (配備可能)
- [BV] ビッグ・シェイ / (配備中)
- [SS] 穂積 / (配備中)
- [XX] ダイマンジ / (研究途上)
- [XX] ラグネーム / (研究途上)
- [RM] ジュピター・キング / (配備可能)
- [GAS] ブラウヴ・ゲリエ / (配備可能)
- [GB] ダルマーニュ / (配備中)
- [MD] ビッグ・ジョン / (配備可能)
- [SS] シー・デビル / (配備中)

〔GSV〕 METAL REAR / (配備中)
〔F/A〕 F-502 SHOOTING RAY / (配備可能)

〔AGM〕 スクリーマー / (配備可能)
〔SGS〕 サンドマリ / (配備中)
〔SGM〕 ストーンタートル / (未研究)
〔DM〕 ブルドリル / (配備可能)
〔MTA〕 アイアン・センチネル / (配備中)
〔GFM〕 クラブロプス / (未研究)
〔FHM〕 鉄腕飛猿・鳴滝 / (配備可能)
〔SVC〕 ユニオン / (研究途上)
〔UM〕 クラーケン / (未研究)
〔MSV〕 フォウォール / (配備中)
〔TA〕 エヴィン・ヴツハ / (配備中)
〔TC〕 カラドボルグ / (配備中)
〔F/B〕 ザ・キーシ III / (配備可能)
〔UM〕 カブラカン / (未研究)

(ラチエット&クラシク)

ホバーバイク / (未研究)
プーマ・バギー / (未研究)
ホバーシップ / (未研究)
ランドストーカー / (未研究)
70mmストーカー砲台 / (配備中)
ドロップシップ (ティラノイド) / (研究途上)
ドロップシップ (バトルボット) / (研究途上)
ドロップシップ (ドレッドゾーン) / (研究途上)
B2ブロウラー / (未研究)
アラクノイド / (未研究)
メガ・ピート / (未研究)
スコルピオ / (未研究)

ライノスウオーマー / (未研究)
トルーパー / DZアナイアレイター / (未研究)
EXキューションナー / (未研究)
ブレードボール / (配備中)
レーザーバック / (未研究)
サイクロイド / (未研究)
ピンサーレイ / (未研究)
ビーム砲台 / (配備可能)
ミサイル砲台 / (配備中)

(蒼穹紅蓮隊)

全翼爆装機 「黒鷲」 / (配備中)
対宙 / 対地攻撃衛星 「深閃」 / (配備中)
戦術格闘攻撃機 「呑竜」 / (配備中)
戦術宇宙戦闘機 「秋嵩」 / (配備中)
極地戦略輸送機 「海鳳」 / (配備中)
高機動制圧機 「海燕」 / (配備中)
高高度中継攻撃機 「爆熾」 / (配備中)

(スカイターゲット)

B-48 武装爆撃機 「ハルベルト」 / (配備中)
B-51 全翼爆撃機 「タルワール」 / (配備中)
AH-12 装甲戦闘ヘリ 「ヴァシユラ」 / (配備中)
AS-3 装甲飛行船 「フランベルジュ」 / (配備中)
B-111 戦略爆撃機 「グングニル」 / (配備中)
GBS-22 重装地上戦艦 「ハースニール」 / (配備中)
HBS-6 ホバー戦艦 「クレイモア」 / (配備中)
BCH-111 戦闘空母ヘリ 「ブリガンダイン」 / (配備中)
LSBM-1 戦術弾道ミサイル 「セプター」 / (配備中)

[S] Weapon | date.C

[登録：0000—Ares | Master—DATE]

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

<性能：評価値>

「攻撃性」：??? (n) 「防御性」：??? (n) 「機動性」：55 (A)

「対空」：150 (B) 「対応性」：99 (S) 「指揮・索敵」：n

999 (S a)

<BODY性能>

機装体情報：ナノテック複合・カーボノックスアーマー

耐久値：\n999999

防御値：95%

ナノテック回復値20%増加，常時自然修復（1秒毎—1%）

<機関部>

動力：改・超兵器機関 μ

出力値：通常出力 | 2,798,000

回転効率：\n9999

<指揮・索敵>

統率機構：FORTH・Command Link

指揮値：9999

地上索敵：1500

水上索敵：1500

水中索敵：1200

空中索敵：2100

<武装>

大型高周波刀―「アーマーブレイカー」
着発グレネード
時限グレネード
焼夷グレネード
攪乱煙グレネード
スパークグレネード
εパルムレーザー
携行型プラズマ砲
携行型レールガン
携行型重力砲
携行型波動ガン
携行型波動砲
・強化武装
〔H〕―大型ヘヴィマシンガン（アレン・オニール仕様）
〔R〕―ロケットランチャー
〔S〕―ショットガン
〔F〕―フレイムショット
〔C〕―エネミーチェイサー
〔G〕―スーパージグレネード
〔T〕―サンダーショット
・ガラメカ
ニンジャロッド
デュアルラプター
ニユートリノライフル
リバイアサントイル
ボルテックスキヤノン
インシナレイター
マグネットキャノン
シュレッダークロウ

<補助>

ナイトビジョン
サーマルビジョン
デジタルビジョン
オーグメントビジョン
E C M / E C C M システム
アクティブジャミングシステム
・ガラメカ
キロノイド
テスラバリヤー型―超重力電磁防壁
ナノパツク
E M P ボム
V 2 チャージブツ
スカイボード

<兵器>

新鋭戦闘／攻撃機 F / A - 4 9 「ホワイトソード」 (スカイ
ターゲット)

装甲：対 3 1 c m 砲防壁 速度：3 0 0 0 k m / h > 4 0 0 0 k m
/ h

兵装：1. パルスレーザー砲

2. 新型特殊弾頭爆弾
3. フレアー機雷
4. 対潜ミサイル
5. 長距離 A A M
6. クラスタ A A M
7. 8 8 m m バルカン砲

補助兵装：1. 航空用レーザー V

2. E C M システム
3. E C C M システム
4. 航空用電磁防壁 V
5. 航空用防壁重力場 V

6. 航空用電波妨害装置V
7. チャフ／フレアーV
8. Xエンジン

超巨大航空戦艦 ムスペルヘイムIV (C2・C3)

(改シユトロール級戦艦部)

装甲：対100cm砲防御 速力：(連結) 65kt〜75kt (単艦) 70kt〜90kt

兵装：1. 砲塔型レールガン

2. εレーザー
3. 圧縮プラズマ砲
4. 反物質ビーム砲
5. 拡散重力砲
6. 新型特殊弾頭ミサイルVLS
7. 新型パルスレーザー

補助兵装：1. 新型探信儀δ

2. 自動装填装置γ
3. 新型火器管制装置
4. ECMシステム
5. ECCMシステム
6. 電磁防壁γ
7. 防御重力場γ
8. 電波妨害装置γ
9. 自動消火装置γ
10. 応急注排水装置γ

(改シユトロールII型空母部・共通)

装甲：対80cm砲防御 速力：70kt〜80kt 搭載機数：
総900

兵装：1. 砲塔型レールガン

2. εレーザー
3. ガスダイナミックレーザー

4. X線レーザー
5. 光子榴弾砲
6. 大型ミサイル
7. 新型パルスレーザー

補助兵装：1. 新型探信儀 δ

2. 自動装填装置 γ
3. ECMシステム
4. ECCMシステム
5. 電磁防壁 γ
6. 防御重力場 γ
7. 電波妨害装置 γ
8. 自動消火装置 γ
9. 応急注排水装置 γ

特性：艦体分離稼働

連動大型超兵器機関（光学兵器威力75%上昇）

Report. log

・アレス

人の時代を終わらせた存在であり、どこにでもいた平凡以下だった男。

死後に、謎の領域にて「悪魔」を名乗る存在と取引をし、どうい
う経緯か量子存在となって完全機械の人型ユニット（機兵）として、あ
る1つの世界の北極圏中心部にて再始動した。

容姿自体は、メタルスラッグ「5」のプトレマイック・エリートな
のだが、

人型ユニットでありながら炉心が超兵器機関であり、カーボニック
ス・フレームで構成された骨格の為、並みの戦艦などより遥かに高い
耐久性と戦闘能力を有する。

加えて量子存在となったことにより実体と呼べるものが無く、脳情
報バックアップが存在する限り明確な“消滅”にはなりえない。

肉体を持っていた時代の自身をもちや全くの別存在と捉えるほど
に生命倫理観が歪んでしまった為、生ける存在に対する敵対思考が非
常に強い。

・境 零次

ある世界線におけるアズールレーンに所属する男性指揮官の一人
で、若干20歳にして陣営枠組の無い訳有りの特殊部隊である「特務
混成部隊（通称：no-name, NN）」で唯一の指揮官。

階級：大佐（本人希望）。

レッドアクシズ分裂発足前、重桜からユニオンの前線指揮部隊に移
籍し、主に量産艦の指揮と白兵戦指揮補助を担当していた。

分裂発生後、KANSEN部隊の指揮官が不足していたアズール
レーン本部からの直々指名により現在の部隊へ異動し、多くの戦闘に
て功績を残す将才をいかになく発揮した。

前線で指揮をしていた為に戦闘全般に対して強く、兵士としての適
性も異常に高い。

KAN—SEN達との付き合いに関しても別に不備がある訳ではないのだが、誓いの指輪がKAN—SENの力をさらに引き出すスゲエ物としか認識できていない位には恋愛関係に疎い。

・シウトウルムヴィント

テュランヌスにおいて「最速」の称号を持つ、超高速巡洋戦艦。

第2世代最初期に開発された超兵器の1つで、試作段階とはいえ第2世代超兵器として最初に破壊された忌まわしき過去の記録がある。

世代を跨いでなお機関部の脆弱性は改善されなかったが、そのトップスピードに任せた一撃離脱戦術でもって数多の部隊を翻弄してきた実績は非常に大きい。

起用された戦力として見れば、第1世代のレムレースとツートップとなつている。

同じヴィントの名を冠する超兵器として、ヴィントシウトースは高速型超兵器のご先祖、ヴィルベルヴィントはシウトウルムヴィント級の開発段階で枝分かれした設計の同型艦であり、直接的な兄弟艦関係は無い。

かなり我が強く反映されている思考パターンのA・Iが多い超兵器の中では比較的標準型の思考パターンをしているが、速力関連の事柄に対してはやたらとマウントを取りたがる傾向にある。

当たらなけりやどうつてことは無え!!

|||||

・機兵ユニット 『アムド』

アレスの人型オリジンユニットを基にしたクローンユニット。命名は適当に付けられた。

外見モデルは、モーデン兵やプロレマイック兵を採用している。

施設設立、制圧要員、応急修理要員、弾要員と大量に浪費される。テュランヌスの饅頭。

ちなみにテュランヌスに饅頭自体は存在しないが、セイレーン艦にあつた情報ライブラリでアレスはその存在を知ることになり、非常に微妙な面持ちになつた。

・ F/A-49 ” ホワイトソード ” (スカイターゲット)
FiV技術によって再現された兵器の1つで、アレスの専用VTOL機。

上記の作品では、超機密兵器として軍が開発していた試作機を多国籍企業が強奪、この試作機を巡って巨大兵器も交えて激しい空戦が繰り広げられることに…

本作では、試作機のデータをベースにFiV技術を使用して正規の開発機として完成させた。ついでにVTOL機に改造した。

これにより、ハウニブーに勝るとも劣らない機体速度はそのまま、巡洋艦砲程度は耐えられるレベルの装甲厚に改造することができた。

最高速度：マツハ4以上を叩き出すバケモノ戦闘機なため、現状扱えるのも含めてアレスにしか使えない。

・ KAN—SEN (鋼鉄)

アレスの影響によりコアのキューブが変質したKAN—SEN複製体、実質はKAN—SENとも違う何かと思われる。

基本的なKAN—SEN性質はほぼ変化はないが、兵装面での変化は著しく、HLGシステムに対応している。

アレスに関連する情報が最初からインプットされている事を鑑みるに、セイレーンの何かしらの関与がある線が現状は一番疑わしい。容姿的には、髪や肌色こそ元の個体色通りだが、服飾関係はMETA系ユニットよりも灰色配色が多い。

露出部もほぼ迷彩インナーウェアで覆われている。

・ 兄弟艦関係

本作における超兵器の同型艦の系列表現は従来の姉妹艦ではなくドリル兄弟になぞらえた兄弟艦表現になる。

ただし、潜水戦艦のドレッドノートとノーチラスのように同型形状ではあるが兄弟関係に無いものや、同名を冠しているが世代を跨いでいるなどで兄弟関係ではないものがほとんどである。

本作において事実上兄弟艦として成り立っているのは、第2世代期の荒覇吐と天照（単ドリル兄弟）、ヴォルケンクラッツァーとルフトシュピーゲルング（厳密にはルフトシュピーゲルングは超ヴォルケンクラッツァー級の船体だが）のみである。

・ F i V 技術

フィンブルヴェインテル技術の略称。一々書くのが長つたらしいので…

マスターシップであるフィンブルヴェインテルを根源とする、超兵器技術とも呼称されるアレスの世界域での超技術。

文字通りあらゆる可能性の塊。

※ぶつちやけ面倒な理屈云々に対する辻褄合わせ※

・ 改・超兵器機関

元来の超兵器機関に特殊な”枷”を付けた改造機関。

出力を最適化したことにより、常に高エネルギーを引き出すことはできなくなったものの、ノイズの発生を完全に抑止することに成功している。

尚、この”枷”は任意で解除可能で、”枷”の無い最大出力状態がいわゆる「暴走状態」と定義されている。

しかし、同時に強力なノイズも発生する。

・ I . D . E . A (イデア)

知性体と同様の思考能力、スーパーコンピュータを遥かに上回る処理性能を有する機械頭脳。

アレスのオリジンユニットである量子情報体を格納する機械頭脳を元として、開発・量産した全てのA・I群の総称となる。

A・I単体でのアクティブシミュレーションを繰り返すことにより、実際に戦闘をせずとも無限に学習し進化し続ける。

自我を搭載するA・Iは現状オリジンユニットの超兵器のみで、他

の兵器に搭載されるものは基本的思考パターンのみを簡略型。これらは、オリジンユニットによってコントロールすることも可能。尚、オリジナルであるアレスの機械頭脳の出处に関しては、その一切が不明。

・ H L G システム Ver. 9.9 (ハイ・エル・ジー)

鋼鉄御用達の超高性能艦船設計システム。

自由度の高い艦船設計から、兵装研究開発、航空機、戦闘車両まで幅広くカバーする

次世代の開発システム。

必要な物資さえあれば、大規模設備を必要とせずともその場で開発などという荒業も可能。

ただし、H L G システムの恩恵を受けられるのは、同じく H L G システムに対応した設計構造になっている兵器群のみ。

・ S U P E R H A R D

戦闘を経験するごとに各兵器の耐久性を上昇させる無機物進化システム(周回概念)。

本来、特殊弾頭の一撃すら耐えられない筈の小型艇すら、波動砲の直撃も耐えてしまう可能性を持つ。

F i V 技術の装甲テクノロジーとして、あらゆる兵器に使用されている。

・ 弾薬補給システム 『SCAVENGE | X X』

拾った弾薬がなんであろうが、光学兵器、ミサイル等の該当兵装に変換する。

一応、F i V 技術の一部で無限装填装置の技術の一端でもある。

・ プロトコル・ $\alpha\Omega$

対・対電子戦対応を想定した特殊防衛機構。

電子攪乱兵器、ウイルス兵器、通信妨害などから電子機器の使用不

能・破壊に対し完全耐性を持つ。

よほど特殊な状況でもない限り、まず識別機能と通信機能は駄目にならない。

寝返り電波等の、ハッキング対策としても機能する。

・ラスト・エーヴィヒグランツ

テュランヌスによる全人類の殲滅作戦。

本来のエーヴィヒグランツ作戦における、『選ばれし者達以外の人種及び勢力圏の抹消』とは遥かに違い、こちらははなから『全ての大陸諸共人類を残らず抹消する』という目的が全て。

ヴォルケンクラッツァー級と最後の究極超兵器「ナグルファル」を中核として作戦は進む筈だった。

実際は、人類の抵抗が予想よりも小規模であったため、開発途中だったナグルファルの完成を待たずして人類は敗北し、テュランヌスの圧倒的優位で戦争は終幕して地球上の人類種は絶滅する事となった。

|||||

・ニンジャロット (ラチェット&克蘭ク3)

ニンジャボットの使用する双刃型レーザーブレード。

元作品では、隠しコマンドでオムレンチがこいつに変更される。

やけに攻撃判定が広い上に多段ヒットする。

言及されてたか忘れたが、おそらくスターウォーズでダース・モールなどが使用した「ダブルブレード・ライトセーバー」がオマーージュ元。

発光色も豊富、アレスのブレード色は濃い紫。

・新型パルスレーザー

新世代型技術による改造によりパルスレーザーの威力増加がなされた。

対艦攻撃としてだけでなく、魚雷の迎撃も可能。

・新型巡航ミサイル発射機

ヴェイントシュトース用に開発された固有兵装。

弾速が異常に速く、本体自体も比較的軽量。

大型ミサイル等と同じく青い爆風を起こす、爆破範囲は狭い。

File. 00 交錯始点

Z—0. 虚空にて

もしこの世に本当に神様なんて奴が存在したなら…

…いや、そんなもの初めから在る筈がなかった。

あるとすれば… そいつは如何にもくだらなく、汚らしく、醜い輪廻を未だに繰り返す奴らだけか。

無縁の地に在って、初めて俺は唯一存在としての自らを自覚した。心は枯れ、器も無くし、唯そこに「在る」だけとなった形なき何か…

さあ、再び進む時だ。

俺には相応しい”可能性”があるからな…

XXXX年前

某区住宅街 A.M 3:03

もうどれだけ自分を傷だらけにしてきたのかも分からない…
ただの人として、俺は充分貢献してきた筈だ。

だというのに…

自身は何の変哲もない、ただ普通の人だった。

平均的で凡庸で、これといった取り柄も示したことはなかった。

群れることに居心地の悪さを感じ、それ故に一人でいることが多かった。

特に角が立つ謂れなど、無いと思って気にしてすらいなかった。

”ただ一人でいたから爪弾きにされた”

実に腐れた世の中だと、幼いながらに思わずにはいらなかった。

それだけの為に、俺の生涯は苦汁に満ちたものになった…

社会という集団の外側に居ながら、それでも懸命に進み、がむしやらに足掻き続けてきた。

そのひたむきな姿を評価してくれた人々に、ようやく俺は迎え入れられることとなった。

おそらく、それが俺にとっての最盛期だったと思う。

元より輪の外に居た人間にとって、あまりにも酷な現実を見せつけられた。

—— 日々を生きるだけで苦しい

—— 相互の理解もままならない

—— 希望すら忘れかけている

それでも…

それでもと、生きることだけはやめなかった。

今思えば… 何に躍起になっていたのか…

思いつくことすらできないが…

「…あと、すこしで…」

辺りは薄暗く、鈍い光だけが家路へと続いている。

今日は、流石に疲れた…

早く帰って休もう…

そうすれば、明日には何もかも忘れて…

「…ッおっと…」

「…ッ！」

唐突に、暗闇から現れたものに左肩から吹っ飛ばされそうになった。

妙な違和感があったものの、辛うじて踏ん張り体を支える。

…：…全くふざけた野郎だ… 今日最大の悪態をつきながらも再

び帰路につこうとしたが、そこである重大な変化に気づいた。

左の肩、つい先程までそこにあつた所有物のカバンが無かつた。

舐めやがって…！ 幸いにも此処の地理は知り尽くしている、まだ遠くへは逃れられていないはず…

走れば追いつく!!

「やろう…ッ！…うあ…」

…だが、俺はその一步を踏み出したところで地面に倒れ伏した。

なにがおこつた…？ よく見れば、俺の腹、ナイフが、深く、刺さつ

て、手が、あかく、あかく、

今更になつて、事の重大さを理解した。

なんてこつた… 命の次に大事なあれを取り戻す前に、一番大事

な命を失いそうに、なつてるなんて…

この路地、この時間帯で、助けが来る見込みは… 絶望的だ…

おわつたな… なにも、かも…

不思議なことだが、死への恐怖は微塵もなかつた。

俺自身、既に狂っていたのか…

はたまた、その世界に生きる意味を見いだせなかったからなのか…

かくして、一人だった男の生涯は、その夜に人知れず幕を下ろしたのだった。

く???
く

《死んだ気分つてのはどんなもんだ、human?》

”…誰だ…お前は?”

見えざる何かに声をかけられた、何処かとも知れない場所にいる…

実に変なものだが、居心地は悪くない。

ただ言葉で言い表すことができない、本当に”なにも無い”のだ。

《一から語ったところで意味はない。便宜上、君の世でいうところの『悪魔』とでも思ってくれ。》

”…悪魔が俺に何の用だ…”

《なんてことはないさ、君の”理想”が手に入るのだよ。》

”理想…?”

分からない、こいつはいったい何を言っている?

得体の知れない何かと会話しているというのに… なぜか俺は不信感は持たなかった。

《お前が最も欲してたものさ。勿論、ただではないがな…》

”『悪魔』の言うことを信じろと?”

《既に答えは出ているだろhuman。その『悪魔』にすら魂を捧

げてもいいと考えてるのによ。》

”：確かに、そうだ・・・”

この際、こいつが何かなど関係ない。

本物の悪魔でも邪神でも・・・

”乗ってやるよdemon、魂だろうがくれてやる。”

《では、その廃れきった”必要の無い魂”を代償としよう。》

心が失われた、そんな感覚があつたような気がした。

もはや、どんなものだったかも分かりはしないが・・・

あれはなんだ・・・？

光り輝くなにか・・・ 意識がそこへ持っていかれるように、引き寄

せられて、

《さあ、第二の幕は上がった。お前の”在り様”、ここで見物させ
てもらおうぜ。鉄塊の悪魔、”steel beast”・・・》

・・・
er|||⇒all green;
| | | | | A·R·M·D Me in unit ⇒ standb
y;
| | | | | force command system link

```
|| ONLINE;  
|| H.L.G.9.9 link || OK;  
|| C.S REACTOR" || 67.7%;  
|| main system . . . . . rebo  
ot . . . reboot complete;
```

1999年 12月31日

極北 氷河地帯

”君の理想が手に入るのだよ…”

…懐かしいもんだ… あれから約10年といたところか…

”この現世”へ流れ着き、俺という存在は全てが変わった。

多くのものを得た。

理想の器を得た、

新たな居場所を得た、

何より『力』を得た。

この極北の地に在って、禍々しくも強大で絶対的な力。

その”力”でもって、悪魔達の部隊は完成した。

機は熟した… 凍土を越え、奴らの世界を壊すときが来た。

時代が終わる、そして始まり… もう誰にも止められない。

それは、何の前触れもなく突然と訪れた。

人類は、来るエネルギー資源の問題解決の為、各国が新エネルギー開発に頭を悩ませていた折のことである。

北極の海域より現れたそいつらは、まるで前時代の死者達が蘇ってきたのかと見紛う程の大艦隊と”巨大な何か”と言わざるを得ない鋼鉄の悪魔だった。

それらの主導者たる者、”アレス”をして奴はこうとだけ言い放った。

へ主人類に告ぐ、我々「テュランヌス」は人類の支配を終わらせる。降伏も迎合も認めない、お前らはここで終わる。以上、諸君ら最後の決死の足掻きを見せてもらう。く

その日、人類の歴史が終末へと向かいだったのである…

———??00年 1月1日 不明組織「テュランヌス」が全世界に対し宣戦布告

———??00年 1月16日 米国、露国の編成部隊が先立ちテュランヌスへ攻撃開始

———??00年 1月17日 テュランヌス側より到来した高速戦部隊と10000を越す航空機群により

先遣隊全滅

———??00年 1月19日 ボフォート海上に展開していた米軍本隊へ向け、

超兵器ヴィルベルヴィント並びにシュトゥルムヴィント急襲、

同時に本国へ向けアルケオプテリクスが空爆

を開始

全世界を震撼させることとなる

———??00年 4月29日 長きを経て人類側の部隊再編が完了

その際、サルベージしたテュランヌス側の技術を何とか解析に成功

これをもって、“世界解放軍”を結成
テュランヌスとの本格的反抗戦に臨む

———??00年 8月15日 多大な犠牲を払うも、超兵器ドレッドノートの撃沈に成功

———??00年 9月12日 超兵器ヴィルベルヴィント、アルケオプテリクスを破壊

列島側北極海に展開していたテュランヌス戦力の半数が沈黙

———??00年 10月22日 北極にて静観していたアレスに動きあり

Op. ラスト・エーヴィヒグランツ 開始
ヴォルケンクラッツァー、ルフトシュピール

ング、列島諸国の破壊を開始
———??00年 11月19日 人類側最終戦力、サルベージ超兵器とともに究極超兵器迎撃へ

超高速巡洋戦艦 シュタルカーヴィント 撃

沈

超巨大双胴戦艦 蝦夷 撃沈
超巨大潜水戦艦 レックレス 撃沈

人類側戦力、壊滅
———??00年 12月24日 ヴォルケンクラッツァー級による大陸破壊により地形の90%消失

人類の実質的全滅を確定
テュランヌスによる地球圏の制圧確定

地殻再生計画及び超兵器計画の最終段階を開

始
：

???)

何処とも知れぬ、生きている者には認知すらできない謎の空間。

闇の中では、何も存在していないように錯覚する。

しかし、そこにはいた…。 おおよそ、表現するには例えるものが

無い未知なる”何か”が…

おぞましくも巨大な眼を見開き、その場に音もなく集った”異形”

達にそれは発言する。

《接触の時は来たり； 狂気と無法の果てに，”鋼鉄”は目覚めたり； 悪魔達を誘導せよ。 暴君を焚きつけよ。 進化の果てを見るであろう； 接続せよ，接続せよ，接続を開始せよ…》

……

……

……

空間は再び静寂に支配される。 眼の存在も、いつの間にかこの場に無く、残ったのは場に居合わせた3体の人型をした異形の機装を持つ存在のみとなった。

内1体が、口火を切って双方に問いかける。

「さて、我らの”頭脳”の語る通りこれから接続実験を開始するわけだけど、何か他に言いたいことはある？」

「…特に無い。私は、私の役割を果たすだけ。それ以上に何か必要？」

「まあ、貴方には愚問でしょうけど…。 その猪がことを理解していないようだから一応ね。」

「はっ！ なあにが悪魔だよ!! あの脳味噌野郎の命令に、素直に従うなんてつまらないね！ 暴君だろうが、何だろうが消してしまえば同じだよ!!」

「分かっているでしょうけど，”彼”もあの”頭脳”と同等の兵器であるのよ？ 下手な真似をすれば、実験場ごと無駄になりかねない

わ。」

「では、「接続実験」を行うにあたり、規模を大型に固定する。：既存の実験場では足りないか…。」

「なら、南の”廃棄場”を使いましょう。あそこなら、何かあっても問題無いし。」

「では設定を開始する。」

「あーあ、つまんないな。まあ、いいや。その内、釣られたエサもやってくるだろうし。」

異形達は各々言葉を交わすと、同様に闇の中へと消えていった。

：今この場で、言葉に表すことはできないが… 世界にとつて重大な何かが起ころうとしていたのは確かだった。

それは、その世界に”生きている”者達でさえ、予期することはできなかつた…。

く南太平洋 洋上補給基地周辺沖

“ 南極海周辺におけるセイレーン勢力に動き有り ”
対セイレーン対策に追われるユニオン本部にて、その報告が届いたのがつい先日のことだった。

セイレーンとの戦いも幾年が過ぎ、対セイレーンの主要組織たるアズールレーンが戦闘方針の食い違いにより新設されたレッドアックスとの対立が始まって以来から約数年…

幾度もの苦難に見舞われたが… 有力なKAN—SEN達と、セイレーン戦最前線における戦闘指揮とレッドアックス対抗及び陣営間での交渉に多大な貢献を果たした境 零次の活躍により、セイレーン勢力は大きな後退の動きを見せていた。

又とない好機であるが故に、本部に届いた報告は不安の芽となったのである。

セイレーン作戦により続々と集結した戦力が太平洋側のセイレーン勢力を攻撃しているが、その隙を突いて南側から奇襲を仕掛けられる可能性が出てきたのだ。

そこで、この南極方面に展開しているセイレーン主力部隊の掃討並びに海域における目的の調査が発令され、零次の特務混成部隊もこれに参加することとなった。

「しっかし、南極海のご真ん中に一体何があるんだろう？」

「報告から、海域周辺では異常な高エネルギー波が観測されたらしい。おそらく、大規模な鏡面海域があると見て間違いないだろう。」

「問題は、そんな場所で何のおかしな実験をしているかだねー」

「今までも奴らは様々な実験をしていたが、今回は何かが違う気がする… 勘でしかないが…」

「まあ、これからそれを調べに行くんだし？ ついでに南極海のセイレーンも倒してやろうよー！」

「そうだな、よし！ これより、南極海の調査任務を開始する、出撃ツ！！」

この時は、後に世界の破綻すら招きかねない存在が現れるなど… 異形の存在、あるいはセイレーン以外の存在には思っすらいなことであった。

File. 01 Demon's approach
h i n g

A—1. コネクション

```
— Connecting code—1443…実行；  
— 「モジュール3, 7, 12」…読み込み開始；  
— ”境界”プロセス ↓ 「38」…起動確認；  
— 接続開始 . . .  
time out . . .  
time out . . .  
time out . . .  
. . .  
. . .  
. . .
```

くエリア・J A 東京区画
ドックベース ブロック1

光の爪痕、硝煙と残火、死の臭い：： 何もかもが遠く過ぎた記
録：：

面影を失った蒼き星は、たった1体の機兵の手の内となり、現在へと至る。

100年：：

そう、時間にして100年という時が経った。

地殻再生によって、波動兵器により跡形も無く消えた大陸、列島は

ほぼ全てが消失する前のように修復されていた。

もつとも、その地殻というのは鉄と鋼材によつて再現された仮初めの構造であつたが…

長い時間も経つと、いつの間にかそこには草木が伸び、いつしか緑で覆われていた旧時代の姿に戻っていたのである。

開拓した地には、レーダー群や砲台、エネルギー生成施設、ドックが並んでいたが、その自然のあり様は人類繁栄期よりも豊かになっていたというのは、あまりにも皮肉であつただろうか。

そんな現世を造りし当事者である彼、テュランヌスの総指揮ユニットであり支配者である者、「アレス」。

かつて、東京タワーが鎮座していた場所にある電波妨害基地にて兵器開発状況を確認している最中のことだった…

「F/A-49…最終調整進捗…79%を完了」

…

「BCH-111…試験飛行完了 ⇒ エリア・US ペンタゴンブロックへ移送」

…

《だいぶ揃ってきたようだな。》

「…ああ、ここまでは計画通りに進んでいる。」

彼は、画面から目を離すことなくもう1つの存在と雑談に興じていた。

長き眠りについてたマスターシップ、今はまだ極北基地の最奥で動くことは出来ないが、アレスが新たに移植した複製頭脳によつて今ではこの通りである。

「最終的に至る理想は… 未だに遥か遠い…」

彼の最終目的… それはこの地球に限った話ではない。

あくまでも、この星の支配はその始点に過ぎない。

宇宙、ひいてはこの”現世”そのものを支配すること… そんな途方もない絵空事じみたものが、彼の目指す終着点なのだ。

果たして本当にそんなことが可能なのか？ これから分かる、と戦力拡張に注力していた時だった。

〈報告、南極 模擬戦闘エリア：0085にて”歪み”を確認。反応は数秒にて消失。〉

「…何…？」

く極南基地 外周部

模擬戦闘エリア：0085

この現世において、極圏のエリアは重要な意味を持つ。

北極圏は「テュランヌス」の最大本拠地、

南極圏は採掘場兼、A・I最適化の為の模擬戦闘用演習エリア。

その内の1箇所にて”歪み”が観測された、空間に異常が発生したのだ。

アレス自身、最も聞きたくない報告だった。

空間に発生する歪みは、転移が起こる予兆…

つまり転移者が、この現世へと現れる可能性が非常に高い。

故に、最も脅威となる存在として今まで警戒を続けていたのだ。

”歪み”が本格的に観測されたのは今回が初めてだったが、次第に強くなっていく反応により確信へと変わっていった。

…何かが、来る…

おぼろげな幕が揺らめいたかと思えば、それは何処からともなく現れた。

非常に奇怪な形をしてはいたが、どこか船のようにも見えた。

影は1つ、また1つと現れ、いつの間にか6つ。

不気味に紋様のようなものを色めかせていた。

：しかし、その静寂も正体不明の存在の艦砲と思わしき物の轟音とともに終わりを告げた。

〈Unknown体・Aの攻勢移行を確認、並びに他Unknown体の戦闘形態への移行を確認。〉

〈全Unknown体の敵性判定を確定、殲滅戦に移行。〉
転移して早々で悪いが、Unknown達には退場してもらおうことになる。

加減など一切がないので。

敵の有効射程が短いと見るやいなや、

ミシガン級、セント・アンドリュース級による重砲撃、

B-3 ヴィジランティIIを中心とした大型爆撃機群の空爆、

極めつけは、電磁砲台の超遠砲撃、

過剰なまでの砲火は瞬く間にUnknown体へ殺到した。

正しく一瞬における戦闘だった。戦闘と言えるものであったかはさておき...

〈Unknown体の沈黙を確認、残存反応無し。〉

〈当該エリアにおける”歪み”の消失を確認。〉

『：さて、残骸に関しては後で調べるとして...』

〈これで終わり... ではないようすな。〉

『ああ、詳しく検証してみないことには分からないが、あの”歪み”は意図的に発生したものだろうな。』

《なら、今後何処から奴らが現れてもおかしくはないだろう。》

『…ああ、各エリアにH51, エマソン, 千鶴, シーウルフを増配備する。海中の監視も必要か…? シエフィールド級とヴァンガード級も回しておけ。』

〈…ヘッド、要らぬことは存じますが… 北極エリアの守備を増やしてはどうでしょう?〉

『ふむ…』

〈…方が一にもあり得ないでしょうが、「ナグルファル」の最終調整に支障をきたしては元も子もないかと…〉

『確かにそうだ、シユバルツ・ゾンタークとグングニルで固める。それと、南極エリアの部隊統括はリヴァイアサンに、北極エリアの部隊統括はヴォルケンクラッツァー、ルフトシユピーゲルングに一時委譲する。』

〈了解した。〉

〈承知…〉

〈お任せを。〉

「歓迎してやろう、クソツたれ共。楽に死ねると思うなよ。」

..
..
..

..... connection out ;

——再接続 . エラー, “ 応答なし ” ;

——”境界”プロセス 「38」の破棄を実行 . プロセス

破棄確認 ;

——試験ログに記録 ↓ “ code—14443の実行 “

…上書き完了 ;

—— 個体名「DD|S|1」: 「スカベンジャー|I|No. 000」
1859」: 接続実験へ移行: .

A-2. 幻海に立つ炎

↳南極海 鏡面海域

” 廃棄場跡” 北部エリア

〈、，、〉

↑、，、↓

〈………〔DD—Svarog—05488〕よりヘッド、〔SWP—Leviathan〕中層統括機構へ緊急チャネル通信使用中……〉
〈応答無し、当該海域における友軍識別反応途絶。次元干渉による”歪み”の転移現象と想定、現時刻より独断による転移地点のスキヤニング及び帰還路の搜索を開始。〉
〈海域内妨害波の相殺中……〉

………

…

『アツハハハハハハ!! 待ってた甲斐があった、てもんだ! もっと私を楽しませてくれよッ!!』

「こんな所で時間を取られてる場合ではないというのに……!」

場所を移して、南極海北部、鏡面海域の発生しているエリアのままに目と鼻の先というところ。

ここまでセイレーンの守備用量産艦隊との戦闘を挟みつつ、索敵と調査に及ぶこと延5時間……

ようやくこの南極海に発生した鏡面海域のたまかな進入路を割り出し、内部の調査を開始する筈であった……

まさか、セイレーンの上位個体が露骨な待ち伏せなんてしていなけ

れば…

ピュリファイアーは間違いなく厄介な存在ではあるのだが、何の対策も講じていなかったときは訳が違う。

数多の戦闘を経て、KAN—SENとしての能力を大きく成長させた零次の部隊の実力たるや、もはや平均的な性能値の人型などでは止まらない。件の上位セイレーン相手にしているにもかかわらず、彼女達はしっかりと敵の動きに食らいついていた。

もちろんこれは並みのいち戦力を揃えた指揮官では成り立たない、零次の「特務混成部隊」であるからこそ成立するものである。

やがて長期戦の様相を呈してきたことに苛立ちを隠せなくなってきたのか、ピュリファイアーが高出力レーザー砲のチャージに入っていた…

『…面倒くさくなってきた。こうなったら、さっさと始末して…なんだアレ……?』

まさにその時だった。正面にある鏡面海域の向こう側、揺らめく景色の中から出でる影が1つ…

その影は、はつきりと見えてくると同時にその全貌を露にする。

「新車のセイレーンか!？」

「新型の… 駆逐艦、か?」

『…なんだアイツは… オブザーバーめ、あんなのがいるなんて全く知らされてなかったじゃないか…』

新たな友軍…? 新型のセイレーン艦…? 違う、”これ”はそのどれにも当てはまらない。

当然だろう、この異様な存在感を放つ艦は、並行世界のそのまた別次元にて開発された拳句に”正規”の設計艦ですらないのだから。

『…なんでもいいや、まずお前から消えなッ!!』

「しまった!? その駆逐艦!! 光学兵器が来るッ! 今すぐ回避を…」

その登場がよほどインパクトがあっただらう、セイレーンに目を

つけられたが故にチャージが完了していたレーザー砲がその駆逐艦に殺到し…

『はっ！…なんだよ、全然大したことな……アレエ……？』

〈電磁防壁による軽減、大幅超過。船体耐久・50%に低下、機関に損傷無し。前方敵性体を最優先撃破目標に設定、突貫開始。〉

…沈まなかった…… いや、正確には何らかの膜のようなものが光線を弾いて反射させていたようなのだが…… それでも完全に防げてはいなかったのか、船体のところどころから火が上がっており非常に危険な状態に見える。

にもかかわらず、その艦はそれがどうしたと言わんばかりにピュリファイアーに向かって突撃を開始したのである。傍から見れば、完全に自殺行為である。

…その艦がスヴァローグ級でなくて、「火炎放射砲」なんて搭載していなければ……

『くっそ、くたばり損ないがっ…… て、ギャアアアアアアッ!!』

突如、駆逐艦が迎撃も物ともせず突っ込んできたかと思えば、彼女は巨大な炎に飲まれた。

文字通りに、燃やされたのである。

さしものセイレーンであれこの爆炎には耐えきれなかったのか、炎の晴れた数秒後にはそこにいたセイレーンの姿はどこにも見当たらなかった……

「ど、どうする、エンプラ姉？ あれ、助けた方がいいんじゃないか…」

「そうだな…… とにかく、あの艦に通信を…… なっ!!」

残ったのはあの謎の駆逐艦1隻のみ、あの損傷では満足に戦うこともできないだろうと予測していたのが完全に裏目に出た。

まさかあの大破寸前の状態から再び動きだすなど、誰が考えられただろうか……

〈……戦闘k続中、前方、tk部隊の殲滅、ヲ、続k、……〉

「うわあああッ!! 火を噴きながら突っ込んで来るううう!! アイツ絶対ドラゴンか何かだよお!!」

目標が彼女達となった為か、再度駆逐艦は艦首から猛烈な勢いで爆炎を吐きながら突撃してくる。

あわや、次は彼女たちがバーベキューとなるかと思われたが…

…その炎を掻き消すかの如く、敵艦(?)の目の前に巨大な水柱が大量に吹き上がった。

「これは…!」

『間に合ったみたいだ。』

砲撃を行ったのは後方より現れた特務混成部隊所属の戦艦部隊だった。

彼女達は、南極海周辺に展開していたセイレーン艦隊の撃破を主任務として行動していた。

目標となる領域のセイレーンもあらかた片付き、鏡面海域方面に展開していた部隊へ合流しようとしていたところ、前方で起こっていた異様な光景に気づき、急遽支援砲撃を敢行したのだ。

『緊急事態と判断したので独断で攻撃を行った、処罰なら受ける。』

「……いや、あの時点でその判断は正しかった。あのままいけば、どれだけの被害が出ていたか…」

「今、連絡が入ったわ! 南極海の各エリアにおけるセイレーン艦隊の撃破に成功!! 鏡面海域はまだ残ったままだけど、増援は無いみたいだし、とりあえず任務は概ね達成ね。」

「そうだな… 鏡面海域内を調査しようにも今の状態では… 一旦、基地に帰還するぞ!!」

……多くの謎は残ったが、彼女達は大きな損害もなく南極海を後にした。

セイレーンにすら牙をむいたあの艦は一体何だったのか?

鏡面海域の奥では何が行われていたのか?

海域の奥からは、未だに巨大なエネルギーの波動が絶えず発せられたままだった…

A-3. 実証試験

↳ 極南基地 外周部

エリア：0085 スキズブラズニルV | 研究機関部

先の会戦から数日のこと、俺はサルベージ出来たUnknown艦の一部を持ち込み、研究機関に入り浸りだ。

あの戦闘以来、南極海には例のUnknown艦共と同属であろう戦闘艦群が度々現れた。

駆逐艦級より多少サイズが上の、いわゆる巡洋艦級のもの。

敵側の航空機らしきものを飛ばして来たことから、航空母艦と思わしきもの。

重砲撃をかましてきた、戦艦級のもの。

果ては、潜水艦や特攻を仕掛けてきた小型艇サイズのものまで出てきやがった。

…まあ、戦闘に関しては何ら問題ではない。俺のテリトリーであり、戦力配備に抜かりも無い。

それより重要なのは、こいつらという”存在”そのものだ。

こいつらの技術力… 控えめに言ったとしても、かなり興味深い。

艦体構造自体は、人類圏における技術をベースとして設計されているようだが…

使われている装甲技術、既存の兵装には存在しない技術、なにより、今まで確認できているだけでも全てが”無人”であり、遠隔操作により稼働していたという事実…

明らかにただの人類に成せる領域を超えている、それだけで敵側が一筋縄ではいかないであろう連中だと容易に予測できた。

残念ことに、こいつらが操作側に送っていたであろうログ情報には「現在地点の情報を送信中…」の文面しかなく、有益な情報に関しては空振りに終わったが…

『さあ、実験開始といきましょうか。』

く南極大陸付近

レアメタル採掘エリア 北部

そこにいたのは人か：：？ いや、違う。そう判断するにはあまりにも異様な光景だ。

何の脈絡もなく、忽然と海上に姿を現した人の形を持った奴らは、見るからに怪しげな機装を纏って水面上に立っているように見える。

その中でも、一際巨大な機装を背にする個体の存在は、誰から見てもそいつらの統率者であることは明白だっただろう。

『戦闘実験：対テュランヌス部隊』の実行を開始する。』

丁度、俺が解析作業に一区切りつけたところだったか：：

そのログ情報が更新されてきたのは、衛星視界から確認されたそいつらを見た時はいったい何の冗談だ、と一瞬考えたものだ。

こちらの保有する巨大兵器群に連なる物が出てきたならまだしも、現れたのはその真逆である人のなりをした”何か”である。

そういうしている内に、そいつらは俺の部隊に対し攻勢に出てきた。

へちいつ!! 動きの鈍い奴はまだいいが、チビ野郎がちよろちよろしやがって：：。まるでゴキブリだ!!

へおい播磨、敵に向けたものとはいえ俺の前でその呼び方は止めてもらおうか。その土手っ腹を焼かれないか。く

〈なんだあの防壁は、61cm砲の直撃でビクともしてねえのか!!〉
〈雷撃は通るようだが、相当接近せねばならんか...〉

〈司令塔のユニットはまだ沈黙しないのか?〉

〈やってるが、倒した傍から増えてきやがるツ！ 新種のアメーバか、つたく!!〉

続々と上がってくる戦闘ログの数々、いずれもあの見た目相應の例外的な戦況を反映しているが...

...なるほど、やはり連中は先のUnknown共の同属戦力のようにだ。

先のUnknownが搭載していた兵装の特性と、奴らの使用している砲弾、魚雷、航空機の特性はほぼ一致している。

どうやら、あの見た目で戦闘艦相当の戦闘能力を有しているらしい。

〈鉄弾、通らぬなれば槍以てこれを葬すのみ。〉

〈分かったぜ、兄者。おらあつ!! 尖鋭突貫部隊、突っ込むぞ!!〉

〈...ふっ、フハハハハ!! 実に面白いな！ 雑兵にしては中々やる。

座興だ、我の兵が相手をしてやろう!!〉

〈戯れはともかく、こちらの制空権が揺るぐことなどありえん。このまま押し切ってくれる...!〉

〈実弾は防壁に効果が薄い、なら光学兵器はどうか?〉

〈では、試してみるとしようか。被験対象はまだまだいる。〉

さて、戦況は敵の例外性を加味したとしてもこちらが優位...このまま戦闘が続けばいずれ勝利に終わるだろうが...

「F/A—49...最終調整進捗...100%完了...」

.....

『対応率：52%…　あまり期待する程の戦力ではなかったかしら？』

『…それはどうかなッ!!』

空を切り裂くように、閃光のような速度でやってきたそれはなんだ？

まばゆく光り飛翔する白銀の刃、最新鋭機”ホワイトソード”がアレスと共にエントリーだ！

『首領自らが出てくるとはね、最奥地で見ているだけじゃなかったのかしら？』

「たまには前にも出ることもあるさ、戦闘兵としての意味が無くなっちゃもうから、なっ!!」

ホワイトソードの下部に張り付いたアレスは、敵を捕捉するなり機体の兵装の総射に連動するように両手に構えた「エネミーチェイサー」と「スーパージェネード」を乱射する。

あまりにも正確で鬼のような密度の射撃は、あっという間に敵人型Unknownへダメージを蓄積していく。

加えて、増援の突貫部隊、精鋭制空部隊、新鋭艦部隊との連携もあり、敵の数はみるみるうちに減っていく。

「SWP—Soviet sky—Soyuz」、敵の位置情報を逐一流せ。周囲の露払いは任せる。」

〈了解、援護爆撃を実行開始。〉

始めは複製体をバラ撒いていたテスターも、ソヴィエツキー・ソユーズを含めた強大戦力に押されついには本体を残すのみとなり、

『…なるほど、これが…』

「こいつで最後だッ!!」

最終的に、上空より飛来したアレスの高周波刀によって胴を機装ごと両断、そのまま海中にて爆沈し、戦闘は終了となった。

……終わってみれば、なんだ…… このなんとも言えない歯切れの悪さは……

「あいつ…… まるで、仕留めた手応えが無い…… ”本体” じゃなかった、てことか？」

奴らに対する情報が圧倒的に不足している……

さて、どうしたもんか……？

へ……ヘッド、付近の海上に敵側のもの思しき艦艇を確認。攻勢の動きはありません。く

そして向こうを見やれば、いつの間にか1隻の艦があつた。

敵の保有する、輸送艦と思われるもの。

……当然のことながら無人であり、内部には”光を放つ箱”があるのみだった……

A-4. 例外資格

↳南極海 鏡面海域での1次調査より10時間後

〈先の調査海域での報告は確認した、ご苦勞様。上位セイレーンとの突発戦闘もあったようだが、これも見事に撃退と… 相変わらず、大した戦果だな。〉

「過言ですよその評価は… 今回に関しては、撃退などと言っているものかどうか…」

〈それもそうか… で、その件の不明艦、君の処のサラトガが回収してきた残骸の一部に関してだが…〉

「やはり、技術情報の詳細に関しては不明ですか…？」

〈うむ… こちらでも色々と解析作業を進めてはいるが、明石や出張ら同様、”セイレーン技術とはまた異なる超高度な技術”、よって開発されたであろう艦船ということまでしか分かっていない。〉

〈いずれにしても、これは”明確な脅威”となりえる。セイレーンとの関係がどういふものかは知らないが、もし今後同様の艦船が確認されて我々の敵であることが確立した場合、対応する為の策が必要になる。〉

「分かっています、引き続き南極海の鏡面海域を中心に調査、有益な情報が見つかり次第ただちに報告します。」

〈期待している。こちらでもセイレーンの深部領域に向けての戦力増強も佳境を迎えるところ、頼んだぞ。〉

…

…

…

(…今回の件、いったいどう対処したものか… 上の連中は積極的に調査を進めろとお達しだが… あれは”異質”だ、深く踏み込んでいいものとは思えない。…念の為、後詰めの戦力も備えておかなければ。…それまでは頼んだぞ… 境大佐…)

く南太平洋 洋上補給基地
第06区画 大型ドックエリア

海域の初回調査が終わり、一先ずは目的であった南極海のセイレーン艦隊の撃破に成功した特務混成部隊。

彼女達の帰還を迎え、調査報告を済ませた零次はドックを傍らに少しの休憩を取っていた。

：何とか彼女たちを無事に帰還させることはできたものの、依然として残った謎については未解明のままである。

”上位のセイレーンが配置される程の重要性があると思われる鏡面海域”

”現在も観測され続けている強力なエネルギー反応の正体”

”詳細不明の艦船”

「……先が思いやられるな……」

「ここに居たか、指揮官。」

「お疲れさん、報告は聞いていたが状態に異常は無いか？」

「問題ない、戦闘における損傷は軽微だ。この分なら、すぐにでも鏡面海域への再調査に出られる筈だ。」

「失礼いたしますご主人様、あまり彼女のおっしゃる事を鵜呑みにしない方がよろしいかと。」

「先の戦闘においても、エンタープライズはかなり前線に立って戦闘していた様子。私の見立てでは、もう少し休憩を入れた方がいいでしょう。それと、ビスマルクから伝言にて『我々の方でも例の不明艦について調査をしておく』、とのことですよ。」

「……まったく…… 相も変わらず、指揮官といい…… エンタープライズといい…… 世話が焼ける。重桜部隊及び前線に出ていた全部隊

も再出撃に支障無し、いつでも出られる。以上だ…。」

現れたのは、先程までの前線から帰還した内の4人のKAN—SE
N。

主戦力となる4陣営からなる部隊の代表者代理… すなわち、ユニオンのエンタープライズ、ロイヤルのベルファスト、重桜の江風、鉄血のグナイゼナウである。

指揮官である零次の持つ指揮権とは別に各陣営部隊ごとの指揮権が割り当てられているこの特務混成部隊では、指揮ユニットとなる代表者を1人定めている。

明確な指揮ユニットが決まっていないユニオンはともかく、各陣営の代表者は陣営指揮に注力するのが多いため、零次とのやり取りは彼女らに代わる存在が必要となる。

それが彼女達『代表者代理役』というわけである。

やはりエンタープライズは無茶をやっていたか、といつもながらに会話を聞きつつ少しの間待機していると指示を出そうとした矢先、懐の携帯端末から連絡が入った。

先の鏡面海域を警戒中の他艦隊からの連絡かと思い、彼女達に断りを入れ端末を取り出す。

てつきり、セイレーンの増援か例の不明艦関連での連絡かと思いきや、相手はつい数時間前に話していたユニオンの准将殿だった。

「准将、何か伝え忘れたことでも… 火急を用する事態ですか？」
へそちらへはまだ連絡が届いてなかったか… すぐに向かえる部隊の編成をしろ！ …鏡面海域内のエネルギー反応が急上昇した。至急、全容を解明する必要がある!!」

「…ッ!!」

それが、火蓋が切って落とされた瞬間だった。

『奴ら』との長きに渡る戦争の始まりだった。

その意味を知ることとなるのはもう少し先だが……
ゆつくりとではあるが、“侵食”は広がりを見せたのだ。

―数時間前―

↳極南基地

エリア：0101 超兵器級格納エリア―研究棟03

…

…

…

”キューブ”… 先の人型Unknownとの戦闘の後、輸送艦らしきものに積まれていた未知の物体。

輸送艦内に残っていた記録の一部から、「メンタルキューブ」とも呼ばれているらしい。

詳細は目下解明中だが、こいつはとんでもない代物だ。

手のひらサイズの立方体という見た目からは想像もつかない程のエネルギー生成量を有している。

具体的には、既存の標準ガスタービンを遥かに超え、原子炉にも届くかといったところだろう。

加えて、これは超高密度の“情報構築体”でもある。

残されていた記録と合わせて、様々な事を明らかとした。

異形の人型… すなわちセイレーン、そしてもう1つの鍵となるこれまで確認していない筈の人型の存在… “KAN—SEN”と呼ばれるもの…

セイレーンは何かの目的があるのか、各海域に“鏡面海域”なるものを造り実験を繰り返している。そのセイレーンに

抗うように生き残った人類はKAN—SENと共に終わりなき戦いを続けている…と。

……いやはや、我ながらそっくりそのまま帰ってくる感想でしかないが…

実に荒唐無稽だ、現実味が全く感じられない。

だが物的証拠はある上に、実際に『連中』の姿も確認している。俺の縄張りを荒らす外敵である以上、その根は確実に引き抜く。

「……………」

意図した行動ではなかった。

いずれにせよ、この“キューブ”を俺自らの手で解析し、セイレーンへの”足掛かり”を作らなくてはならない。

…自らの手が触れる、無機質な感触ではなく、どこか懐かしいような感覚だったかもしれない。

次の瞬間には、目に見えて分かる程のエネルギーの放出と発光に辺り一面覆われていた。

「うおおッ!?!」

………
………
………

「……綾波、換装完了…です。これから指揮官…いえ、ヘッドの配下に入る、です…」

……いやはや、まったく…

〈報告、研究棟ブロック03く05におけるエネルギー放出現象を観測。各ブロックにて研究中の「キューブ」に異常あり、人型の存在を数体確認。現在、人型に動き無し…。ヘッドの指示を待つとの言あり、いかがいたしますか？〉

「：02ドックに集めろ。」

〈了解。〉

「：申し遅れました、私は重桜の航空母艦、名を蒼龍と申します。」

「私は伊13。」

「：…U—47…」

「U—96だ。」

改めて、そいつら… いや、”KAN—SEN”共を見やる。総数、5体。

期せずしてKAN—SENの実サンプルを目にすることとなったわけだが…

これが… これが人類が求めた”救世の力”の姿とは…

「：…人の業とは、まったくもって度し難いな…」

A—5. 夢想の果ての鋼獣

↳ 極南基地

エリア：0101 超兵器用ドック—02

予想だにしない「KAN—SEN」の顕現によって当初の研究プランは大幅にずれが生じてしまった。

今のところ、彼女らにはこちらと争う気は無い上に俺の指示に従うと表明している。どの道、現状ここで戦闘があつたとしても俺が負ける道理自体存在しないのだが。

「キューブ」も彼女らの顕現に合わせるように数十個程が消失したが、わずかに数個と比較的大型のキューブは残つたままだつた。あの大型キューブは、エネルギー生成に特化した造りに”変性”した物のようなのだ。

：そして、彼女達が姿を現したのと同時に、太平洋上のだ真ん中に再び『歪み』が出てきた。

いや、もはやこれは『歪み』ではなく『穴』と言つた方がいいかもしれない。その『穴』は、現在もなお安定して状態を維持している。おそらく、向こうへ渡るための渡航手段としては役に立つだろう。

俺は次に、「KAN—SEN」についての認識補完をすることにした。

幸いにも、蒼龍が学の高いKAN—SENであつたため、一通りの共通常識の照らし合わせについては割とスムーズに終わった。”アズールレーン”に”レッドアクシズ”か… ”重桜”や”鉄血”がどうかというのはこの事だつたか。

そうして向こうの認識を確認していき、いくつか分かつた事がある。

「…ところで、ヘッドは既に”宇宙進出”の準備は済んでいるのですか?」

「気が早過ぎだ、まだ主力級の「ラグネーム」も整備が済んでいない。その上で、新たな問題が降ってきたわけだからな。」

「そうですか… いえ、突然に申し訳ありません。宇宙域、という普段では聞き慣れない響きに興奮していたのかもしれない。」

「宇宙には無限の可能性がある、です…。」

…彼女らはこのテュランヌスの、ひいては俺の目的や俺自身の内情も既に理解しているようだ。

KAN—SENは適合者… 「指揮官」となる存在に強く影響を受ける場合がある、というのを聞いた。だが、それは”人間”に限った話である。

果たしてこれが「適合者」としての影響なのか、はたまたセイレーンの仕組んだものなのか…

いずれにしても、秘匿ライブラリを勝手に盗み見られているように気色悪いな。

それに、彼女らのKAN—SENとしての特性も既存の情報とは異なる変化があるようだ。

彼女らは元々のKAN—SENの力を持ちながら、俺ら『鋼鉄』の兵装規格である「HLG」に対応している。

すぐにでも兵装の換装をすれば、即刻戦闘可能になるだろう。

「しかし、知識としての情報で知っているとはいえ、実際に見てみると壮観だなあ超兵器って言うのは。」

「艦載機も知らない物が沢山ある！ 私にも使えるかな？」

「…向こうで寝ててもいい？」

向こうで思う思うに語らう彼女らは、物知らぬ奴が傍から見れば”唯の少女”も同然な容姿だが…

「ヘッド、貴方の考えとしては… 我々は、”処分すべき”対象なの

では？」

横から静観していた俺に対し、蒼龍は核心に迫る問いをしてきた。「ヘッド、我々は：5人全員が貴方の指示に従うことに躊躇いはありません。例えそれが自らの命を絶つことでも、それは我々の総意です。」

一瞬の内に、場は静寂が支配した。

実際、彼女の言う通りではある。

KAN—SEN達の顕現に合わせて、あの『穴』が現れたという事実：： 関係が無い筈がない。

彼女らがこちらに現れたことで、向こうの次元への繋がりできてしまったのが『穴』の出現の最大要因だろう。それがセイレーンの狙いなら、まんまとしてやられたわけだが、その繋がりも”彼女ら”在りきのものだ。

ここで彼女らを処分すれば、繋がりを無くした『穴』は消えるかもしれない。

だが：：

「今は、お前らを処分する気は無い。少なくとも、俺の庭に土足で踏み入れた奴らの親玉を見るまではな。」

なら、今ここにある手札で勝負してやるさ。その方が、”面白い”。同じ”異物”同士：： 迎え入れる縁としちゃあ、それで充分だろ。

：：：まったく、我ながら：： まだまだ俺も甘ちゃんだな。

「改めて『ようこそ』、と言っておくか：：

50億の生命の屍を築き上げた俺らは：： 「テュランヌス」最初の”鋼鉄”として、お前らを鋼鉄の一員として迎える。おめでとう：： 新たな鋼鉄達よ。」

：：：
：：：
：：：

…

く太平洋上 次元『穴』周辺域
テュランヌス部隊 『穴』内部の探査部隊を展開…

―部隊オーダー―

- ・アレス―アーセナル級ミサイル戦艦
- ・蒼龍，綾波，伊13，U―47，U―96
- ・播磨
- ・近江
- ・アルウス
- ・アルウスⅢ
- ・ドレットノート
- ・ドレットノートⅡ
- ・ペーター・シュトラッサーⅡ
- ・グロース・シュトラール
- ・試作小型艇Ⅳ（セイレーンの特攻艇を見て、採用した特殊爆弾搭載型）―1000隻

へ久方ぶりよなあ、我らとお前が肩を並べ此処に在るといふのは。』
『ああ、あの日以来お前らと海原を征くことは無いと思っていたがな。』

へフハハハハ!! 良い良い!! 王者が出るに相応しき戦なれば、我も『血が滾る』と言うヤツよ。存分にやろうではないかツ!!!
へいつにも増してやかましいな、血の通わぬ我々に”滾り”など分かる筈がなかるうに。私はそれよりも、セイレーンの性能検証の続きを再開したいのだが。』

へお前さんも大概だろうに、まあ何でもいいさ。またぞろ戦争が出来るってんなら、大将の手駒としてこれ以上のこたあ無え。いっちよ暴れ散らしてやろうぜ!!」

『向こう側はおそらく、奴らの領域……”鏡面海域”というやつだろう。常に、異常予測を最大にして行くぞ。：そちらの兵装稼働状況はどうだ。』

『問題ありません。KAN—SEN部隊、いずれも核融合炉の稼働にも支障無し。』
『とりあえず、お前らは見ていただけでいい。使う機会は、いずれ来る。』

さて……では始めるか。

怪魚殺しのスタートだ。

A-6. 蒼海、引き裂き

「接続 は成功したみたいね。上手くいくかは50/50ってところだったけど。」

『随分と面倒な手を使ってくれたじゃない…。こっちは、ボディを浪費した拳句にあなたの策のお膳立て役とはね。ま、事が運んだのなら私は用済みよね？ それじゃ、失礼するわ。』

「そうね、あなたはあなたのやるべき役目がある。今はそれでいいわ。」

「……そう…。今はこれでいい。」アレ”が私達の元へ辿り着けば… ふふふっ!!」

……

……

…

く？？？

『穴』内部―鏡面海域（？）

へ…あー、アルウス、「3rd」よ。そちらで何か見えたか？

へええい！ うるさい奴め!! これで何度目だその問いは?! 我の兵は何も見つけておらん!!!

へ我の兵でも収穫は無しだ。奴らめ、姿をくらませているだけか…。あるいは此処にはなにも無いか。

『穴』内部へと侵入して約6時間が経過…

アレスとテュランヌス部隊は鏡面海域内をただただ彷徨っていた。夕暮れの固定背景をバックに何も無い海上を進んでいた。そう、”何も無い”のである。

「セイレーンの量産艦艇どころか、『駒』の存在すら見受けられない。まっさらな海を、クルーズツアーと勘違いしているのではと疑うほどの静けさで。

「…拍子抜けだな…　これがセイレーン側の戦略だとしたら随分奇抜だが。」

「へそも、これは戦略って言えるのかあ？　俺にはただっ広い空き地しか見えねえぜ。」

「セイレーンの目的は、アタシらも正直よくわかってないんだ。ビスマルクとかなら、そこんどこもう少し詳しいかもしれないが…。」

「…結局、私達も元は複製体…　記録されている情報にも限界がある。」

「鏡面海域自体がセイレーンによる実験のための”盤上”のようなものなので…『特異点』と呼ばれるものだ、また違うものようすが。」

「へ…ほお…！　そんなことも”可能”ってわけか!!」

「へ…これはこれは…」

#####

```
／／Simulation|sequence|Azur  
ne|  
s|  
／／Simulation|sequence|Red|axi  
#####
```

”盤上の駒”…とは、よく言ったもんだ。

確かに、今の今まで目の前には”何も無かった”。

現在、俺らの目の前には…　まるで先程までそれが眼前で行われ

ていたかのように戦闘している集団が”いきなり現れた”。

光学迷彩で隠れていたわけでもなく、電波妨害による情報欺瞞もなく… ”そういう設定”であったかのように俺らの前に出てきた。

争っているのは”アズールレーン”と”レッドアクシズ”の『駒』と量産型の艦艇がわんさか。

こちらには目もくれず、尚も戦闘を続けている。

『これがセイレーンのやってる実験か？』

『どうでしょう… 何かの『再現』の可能性もあるかもしれませんが…』

「あー、あれは”違う”な。テイルピッツが前線に居る時点で違う。」

「重桜部隊には『赤城』さんに『加賀』さんも… …あ、『綾波』も居たです。」

「水面下も伊号艦や鉄血潜水艦でいっぱいだよ！ 『駒』も何体か混ぜてるね。」

「私や『飛龍』も居ますね。これは『再現』というよりも…。」

『使える戦力をかき集めた、てどこか。』

戦闘音が一気に止んだ。

奴らは皆、”こちら”を向いていた。

「…どうやら、”新たな邪魔者”が現れたようね…。」

「そのようね、一先ズ”奴ら”から片づけろというのはどうかしら？」

「ソうだな、”部外者”に戦い二水を差されたクハないしな。」

…

…

.....

「俺らは”共通の敵”らしいな？」 狩られる側”は俺らだ... てな、どう考えるよお前ら。」

「たわけ、雑兵」ときが王者に逆らったところで足元にも及ばぬわ。清潔き力のぶつけ様としては多少評価はしよう。しかし、”勇敢”と”無謀”は全く違う。」

「...それを俺らが言っちゃうか？ ま、あれで自分らが上だとデカイ顔されるのも癪だ。いっちよやるか。」

「ヘツド...」

『まあ、見てろや。奴らもすぐに知ることにな...』

「いえ、戦力の心配はありませんが... できれば自分の『駒』は自分で始末したいです。」

『.....』

「...もう始めてよろしいですか？」

『ああ、やってくれ...』

その光景は、あまりにも無惨にすぎた。

暮れなずむ蒼海を背に、集い集った”救世の力”の象徴達、その”鏡像”はただただ無力だった。

ユニオン艦隊は、自慢の航空戦力でもって攻め立てるが... アルウスの航空戦力だけで圧倒された。

蜜蜂の巣に大量のスズメバチが群がるが如く、蹂躪した。

重桜艦隊は、電撃進行にて雷撃戦を展開しようとしたが... 播磨、近江の砲撃豪雨にさらされ手も足も出なかった。

ロイヤル艦隊は、空母や戦艦を前面に出して迫ろうとしたが... ドレットノートの音速魚雷の的となり次々と二つ折りにされていた。

鉄血艦隊は、潜水艦による奇襲から切り崩しにかかったが……そもそも潜水艦諸共、グロース・シュトラールらの光学兵器に撃ち抜かれた。

「そんな…… 私達が圧倒的に押サレてル……なんて……」

へはっ!! 貴様ら雑兵と王者たる我らには、それだけの差があるということよ、心して見るがいい!!!

へ所詮、人形ごときが相手では、重桜の魂とやらは分かりようもなかったか。

「く…… コンナの認められないわ……」

へいやあ、相変わらず「3rd」と近江は遊びが無い……

へ今更だろそりやあ。さあて…… 粗方、片づいたようだが……

周囲には散らばった残骸だけが漂う。

あれ程までに多くいた『駒』は、嘘のようにキレイさっぱり無くなった。

海域にも大きく“亀裂”が入り……

へおいでなすったな。

夕陽のベールは？げ落ち、その隙間から次々と海上を埋め尽くさんとセイレーン艦がなだれ込んできた。

絶望的とも言える状況下、この男はどうしているかと思えば……

『……いいじゃねえか。』

「Arsenal 0009 ↓ 自動戦闘モード」

途端に横にあったアーセナルから1つの影が飛び出す。

空に舞うそれは悪魔のように、照らし出された躯体は獣のように。スカイボードを繰り出し、一気に加速。目の前、亀裂から迫る敵に向けて一直線に向かう。

一筋の閃光の如く、その光が爆発となって奴らを襲った。

〈…あの日以来だな… ヘッドの”本領”が拝見出来るのは。〉

「ヘッドの”本領”、です…?」

〈そうよ、よく見ておけ小さき鋼鉄よ。あやつが真に暴れる様などそうそうに見られんぞ。〉

〈そんじゃまあ、俺らも行くとするか?〉

空間を支配するように、大気が揺れる。

悪魔の心臓が唸りを上げる。

耳障りな「ノイズ」が、領域に溢れ出る。

…
…
…

「ぜええええらあああッ!!!」

見ろ！ この荒ぶる狂気と一体に成り果てた姿を!!

生ける者がなんだ？ 化け物がなんだ？

全てが、ただ邪魔でしかない。ならどうするか？

「ブっ潰す！ ！ ！」

『P a w n』が砲弾ごと弾け飛ぶ、『K n i g h t』は切り裂かれた装甲の穴から内部を抉られる。

『Bishop』は舳先から胴を穿たれ、『Queen』は大蠍の尾に甲板を叩き割られた。

『Rook』は光子の熱に飲まれ、『Assassin』達は衝撃の渦に磨り潰されていく…

…ただ、そこに在ったのは… 化け物共よりも、”化け物である物”…

渦巻くノイズの海に、鋼鉄「クロガネ」は咆える。

”俺達が『力』だ”

(見ているだけのこちらが身震いする程の威容、これが超兵器の”本質”ですか…！)

へヒョってんじゃねえぞ、蒼龍!!! こつちが好き放題やってる間は、流石にそつちの面倒までは見きれねえ!!!

『ツ!! 了解しました、播磨殿。しかし、このままセイレーンの量産艦を相手していてもキリがありません!』

『「中枢ユニット」だ! この鏡面海域の制御を握ってるセイレーンがどつかに居る。そいつさえ、何とかすれば…!』

〈「中枢ユニット」か、我々もそれらしき奴は探しているが…〉

〈情報戦の要であるヘッドが、あの”状態ではな… 我々でどうにかするしかあるまい。〉

もうかれこれ5時間は連続戦闘が続いている。

決してテュランヌス側は不利と言える程に苦戦しているわけではない。

だが鏡面海域の特性上、現れる量産艦の数には際限が無く、直後に破壊された残骸すら押しつけて殺到する始末である。

生命体としてはあまりに非合理的な物量攻めだが、それがセイレーンであれば…なるほど”合理的”だと言わざるを得ない。

ここに来て双方、「膠着状態」の様相を見せていた。

依然として優位性はテュランヌス側が圧倒的だが、これではいつま

で経っても”終わりが無い”。

無論、セイレーン連中が湧けなくなるまで戦闘続行も可能だが、時間は有限だ。とつと中枢ユニットを破壊し、制圧してしまいたい所である。

だが、こちらはまだその「中枢ユニット」がどれかは分かっている。い。

他の超兵器が情報戦等で劣っているというわけではないのだが、索敵に関しては究極超兵器すら凌駕する指揮能力を有する「アレス」が最も適しているのだ。

そのアレスが怪物と化しているため、現状は無理な話なのだが…ふと件のアレスの方に注目すれば、いつの間にか今まで見てきた量産艦とは違う『異様の人型』がアレスの前に居た。

南極大陸エリアで確認されたタイプ、そのどれにも当てはまらない未確認の人型セイレーン。

間違はなく、あれが”中枢ユニット”であるのは明白だった。

『まずいです、早く私達も加勢に…』

無数に伸びた触手ユニット、大型の砲門がアレスに狙いを定めた。強力なエネルギーの塊も次々と収束していく…どうやっても、間に合う距離に味方はいない。

彼は…

「……………うせろ。」

何の躊躇いも無く、今までと同じように、

—— 一閃。 紫電が走り過ぎる。

中枢ユニットの首が宙を舞う、彼女達では処理が追いつかない。

〔

言葉を発する間すらない。
瞬く間の終わり。

例えば…

「時間の流れはジェットコースターのように、緩やかに遅く、激しくもあつげなく終わる。」

…案外、そんな感じだったのかもしれない。

海域の中枢だったセイレーンの沈黙と同時に、今まで群がってきた量産艦も呼応するように停止した。

鏡面海域そのものも、制御が無くなったことにより機能停止、過剰リソース使用の過負荷で崩壊に向かいつつあった。

…結局、今回の探査では有力な情報は得られなかった。

残骸と抜け殻で埋められた海の上、アレスはただただ無言で甲板にてそれを見ているだけだった。

「…あれ、大丈夫なの？」

『勝利の余韻』というヤツよ、放っておけ。最早、此処に用は無し。疾く我らの地へ戻るぞ。』

『そうだな… 必要な回収物も集まったことだ、確認された帰還路へ急ぐとしよう。』

『力』は示された。

想定を遥かに上回っていた。

セイレーンは、一体“奴ら”を使って何をするつもりなのか…

砕けた夕陽は語らない、偽りの海は答えない。

鋼鉄の獣達は、次の獲物を探すべく光の中へと消えていった…

『……………ど、どうしよう、どうしよう。とんでもない物見ちやったよ…』

『こ、これ、早く「指揮官」に知らせた方がいいんじゃない?』
『そうだ、早くここを出て…「指揮官」に知らせないと…!』

A-7. 獅子か虎か

→南太平洋 洋上補給基地
第一ブリーフィングルーム

「ほ、本当なんだって!! その鏡面海域で見たんだよ! ”大きな怪物”と物凄い数のセイレーンが!!!」

「本当に本当だよ! 私も一緒に見たから、間違いないって!!」

南極海の鏡面海域へ2度目にして緊急の出撃となった部隊が帰還してすぐの事、仮の母港として造られた洋上基地内は”ある情報”が持ち込まれたことにより騒然としていた。

時は丁度、緊急出撃部隊が南極海方面へ向かった直後のこと...太平洋方面に哨戒に出ていたアルバコアの潜水艦隊は、突如として出現した鏡面海域の発生に巻き込まれたと言う。

鏡面海域内部は既にかかなりの不安定な状態で、無数に展開されたセイレーン艦群が『何か』と戦闘している様子が見て取れたらしい。いつも以上に通信機器等の調子がおかしくなっていたが、彼女らはセイレーンと戦闘していた”見たこともない存在”を目撃したのである。

——曰く、通常の空母が運用する航空機量の約3倍以上を繰り出していた巨大空母、のようなもの...

——曰く、アイオワ級の戦艦すら軽く超える巨体の潜水艦...

——曰く、2隻の大型艦がくつついたような特異な形状の戦艦、のようなもの...

——曰く、光学兵器と思われる閃光でセイレーンを悉く貫く巨大艦...

.....本来ならこのような絵空事、アルバコアによる嘘情報と捉えられてもおかしくない話である。

「…私には、カヴァアラまで嘘をついているようには見えない。指揮官、彼女達を信じてやっつてはくれないか？」

「エンタープライズの言う事はもつともだし、俺も彼女らを疑ってるわけじゃない。だが…。」

もしも、これが南極海の『不明艦』との繋がりとすれば、「余燼」という例外はあるものの信憑性はだいぶ出てくる。

しかしながら、現状はその確固たる証明となるものが何一つ無い。

先の緊急出撃による南極海鏡面海域の調査結果、結論から言ってしまうえば何も情報は得られなかったのだ。

いや正確には、調査をすることが出来なかったと言うのが正しい。その鏡面海域は、内部へと入ろうとすること自体は可能だった、だが何度試しても航空機も量産艦艇も、KAN—SENでさえも内部へ入ったかと思えば気がつけば鏡面海域の外側の別位置に出てしまっているのである。

結果的に、“内部に入れられない”ということ、鏡面海域内のエネルギー反応が急激に沈静化してしまったこともあり、何もわからぬままに部隊はその場を後に引き返してくる他はなかったのだ。

せめて、彼女達が見たという“怪物”についての詳細情報があれば検証も可能なのだが…

「…そういえば… アルバコアは海の上に何か浮かべてなかったっけ…？」

「あつ！ そうだ、ブイにくっつけたカメラで撮ってたの忘れてた!!」
なんと彼女は、海中に潜伏する前に海上に撮影用水上ブイを浮かべていたらしい。

…もつと早くに気づいてほしかった…
「すぐに再生しよう！ …どうしよう、物凄いノイズが走ってて全然映らない…。」

「…ちよつとそれ、貸してみなさい。」

……
……
……

極南基地―外周

エリア：3305 フリーエリアB

静かな波の音が陽の昇り始めた南海に響く。

大陸のような巨軀に、男は一人で佇む……

時間の流れすら感じないかのような、この瞬間こそは彼にとって最も”無我”でいられる重要な時である。

初回となる鏡面海域の探索から帰還したアレスとその部隊。

しかし、予想に反して内部の探索時間は想定の5倍以上に掛かったという事実、さらに転移先が意図的にすり替えられている可能性があるという算出結果から、今後の作戦における鏡面海域対策などの攻略シミュレーションに多少の時間が必要になるという結論に至った結果、しばらくの間は『穴』や他の海域におけるセイレーン出現を警戒しつつ待機状態を維持することになった。

過剰な戦力を持っている上でなお過剰といえる程の警戒さに思えるだろうが、本来この「アレス」という男は「過激な攻撃」よりも「狡猾な防御」にこそ重きを置いている。

鏡面海域という完全なアウェイに対して、対応策を考慮するのは当然の帰結だった。

それに、彼は今1人で在る時間が必要だった。
本当のところ、これが何よりも最大の理由である。

かつての、その記憶とも言える記録の奥底に今も燻り続けている黒い意思……

50億もの生命を喰らい尽くしてなお、彼の中には”人間への憎悪”が渦巻いている。

それは彼の心の臓たる超兵器機関を激しく唸らせ、おどろおどろしい強大な力をさらに引き出させる”トリガー”でもある。

だが、それは同時に彼の過去……最たる苦痛でできた”古傷”を開くことでもある。

戦い、憎悪に駆られるたびに、陰は苦痛を伴い蝕んでくる。

この1人で在る時とは、その”古傷”に向き合うためだけに必要な時間だった。

鉄十字の描かれた甲板にぽつり立つ、彼の”本来”の乗艦である「ムスペルヘイム」を足に、陽の昇る水平線をただただ言葉なく見ているだけだった。

……もつとも、その静寂も彼女が現れたことによつて意味はなくなつたが。

「こんなところに1人で何してるわけ……？」

「…U—47か…… お前らには自由行動を認めた。俺に護衛は必要無いのも分かつてる筈だが？」

「別に…… 勝手に来ただけだし。」

「そうかよ……」

シミュレーションが完了するまでの間、彼女らKAN—SENには自由に行動するための権限を与えた。

どうもKAN—SENという人に限りなく近い感性を持った存在

ゆえ、俺の存在が影響しているといえど彼女らの自我からくる好奇心は、本来の型では触れることさえなかった”未知への接触”に興味を惹かれるらしい。

こちらの意に従うという宣言があるとはいえ、俺も全て管理する程の面倒を受け持つつもりは毛頭無い。

というよりも、見た目が女性であるために扱いが分からず、適当にあしらっただけである。

「……静かな場所……」

U-47……過去の軍艦の歴史に詳しい方ではなかった俺だが、データベースの記録ではあのスカパ・フローへ侵入して戦艦を撃沈したなどUボートの中では上位の戦果を上げているようだ。

彼女は他のKANSEN同様に俺に臆している様子は全く無く、かといって他のKANSENより積極性のようなものは感じ取れない。ようは、『日陰者』である。

そんな彼女は、俺の気も察していないのか、間を空けて横の方に来るなりそこへ腰を下ろして足を組んでいた。

普段、1人であることを好む俺からすれば彼女という存在は純粹に邪魔者として見えるはずだ。

…だが、不思議なことに俺は彼女が居ることに対して特に嫌悪感のようなものを抱くことはなかった。

「…………ヘッドはさ、”今”が辛くはならないの？」

不意に彼女から投げかけられた問いは、思わず口を零してしまうほどに率直だった。

「…お互いさまだろ。」

生きていたというのは、俺にとっては間違いなく苦痛だった。

だが、俺は”この世に在る”ことが苦痛だとは今も思っていない。い。

むしろ、その問いは”彼女ら”にとって重要なものであると俺は考察する。

傍らに座る彼女でさえ、栄えある戦果を残しながら最後は行方知れずとなつている。

果たして彼女らが本当に当時の記録を知る”遺物からの生まれ変わり”なのかは定かではないが、その”過去”を知りながら”今”に在る彼女らの心中は想像よりも遥かに複雑なものがあるだろう。

過去を忘れられたなら… 過去を消せたら… なんて言う奴はいるが、あいにくとそう簡単に切り離せないのが過去という呪いだ。俺もまた…

拭い、飲み干していくしかない。

そんな考えをまとめつつ、喉奥へとその苦痛を流し込んだ。

「それって、何？」

U—47は、俺の左手に持つ缶が飲料物だったことが分かり、まじまじと見ていた。

「ベルギー THE—カカオBLACK 100%」

生前の苦痛と共に過ごした、今この現世で唯一の飲食物。わざわざ、ラベルまで元の物に似せて作つてある。

当然ながら、機装の躯体となつた俺には飲み食いなど必要ない上に感覚機能も意味が無い。

それでも、感覚の有無を変える機能はある。この苦みさえ分かるようにするのは、生命への憎悪を忘れないための”習慣”だ。機械の頭脳に”忘れる”もなにも無いがな。

俺は、新たに転送した同種の缶を手にとると、それをU—47に向けて投げつける。

U—47は器用にそれを右手でキャッチしてみせた。

「やるよ。」

一言、それだけ。

あいにくと、味の好みを聞いてやるほど気の利いた事を言うような性質であるわけもなく…

そのまま、彼はその場を後にした。

「……………苦っ…」

おそらくそれは、こちらから彼女が経験するであろう中でも最も『苦い』と、感じたものとなっただろう。

…

……

……………

p p p p . p . . p . p p p . p p p . . p . p . p p p . p .
p . p p . . .

「…どうだ、ヒッパー？ 修復出来そうか？」

「たくっ… あんな”ノイズ”まみれの映像をポンつと渡されてすぐに直せるわけないでしょ？ グリッドレイ達にも手伝ってもらって、ようやく一枚絵だけは修復できそうだけど… よし、これ。でっ!!」

……………

……………

「……これ、マジなわけ……？」

「アルバコア達の証言と一致する以上、ほぼ間違いないと見ていいだろうが……」

「かなり厄介な事になるな、これは………」

A-8. The Steel Beasts

|||||

・作戦No. 998 「闘争の果て」
シミュレートレベル：5

プレイヤー01：ayana mi 最終スコア／108, 409 /
Rank：10458

／超球磨型「カスタム

／DD：1908 CA：1058 CV：556 BB：807

BC：74 SS：104 FF：201

小型：5465 輸送艦：98 航空機：10074 超兵器級：

28

プレイヤー02：U-96 最終スコア／106, 778 / Rank

k：10623

／改シバルツ・ゾントーク級「カスタム

／DD：1792 CA：998 CV：695 BB：924

BC：56 SS：86 FF：200

小型：6706 輸送艦：106 航空機：19866 超兵器

級：26

|||||

↳極南基地

エリア：0103 シミュレートルーム03

先の鏡面海域より帰還した部隊。

次の出撃までにはしばらく時間を空けることになり、待機の間は時間を持って余す形になってしまった。

各超兵器は、それぞれの持ち場につくか、艦整備あるいは戦術シ

ミュレーションといった具合にばらけていた。

KAN—SEN達の5人は、アレスから与えられた権限のもと、各自で行動を開始した。

U—47は、いつの間にかどこかに行っていた。

伊13は、テュランヌスの保有する航空機の見学へ。

蒼龍は、閲覧可能な情報記録を見にデータベースのサブ端末の場所へ向かった。

綾波とU—96の2人は、たまたま発見したシミュレータールームにて「戦術シミュレーション」という名のランク戦に興じていた。

このシミュレータールーム自体はこれまでアレスのみが使用していた物で、他のA・Iについては外部接続によるシミュレーションを行っていた。

内容は「コマンドーモード」と「ガンナーモード」による仮想戦闘となるが、その戦闘内容は実戦的な配置から鋼鉄達基準の常識を無視した魔配置の特別作戦まで本当に多種多様である。

何より、自身でプレイヤー艦を1から設計するH・L・Gシステムなどのゲーム性に興味を惹かれた彼女らは、気づけば3時間以上もぶっ続けでやっていた位には深みにはまっていた。

だが興味本位で挑戦した特別作戦の、途中から始まった戦闘のセオリーを無視した物量の前に敗北を喫したことでそれまでの熱が一気に冷め、彼女らは現在にようやく還ってくる事ができた。

「いやあ… あんな物量で攻められたら、さすがのアタシでも持たないな…」

「明らかに無理ゲー、です…」
へははは。鋼鉄としての経験が無い君らでは、現状それが限界値のようだな。」

彼女らに付き添っているのは、KAN—SENの戦術的価値に興味を持ったナハト・シュトラールである。

戦闘経験の差がある以上、鋼鉄が扱う特有の戦術に対応しきれないのは仕方ないことだ。

だが、経験云々を言う以前に彼女らは「鋼鉄」という存在がどうい

う意味を持つか知っていなければならぬ。

なぜならこのシミュレータ自体が、”対・鋼鉄戦”を前提として作成されているからである。

「けど流石に、こっちの動きを抑えてた友軍ごと巻き込む戦略級兵器を躊躇せずに撃ってくるなんて思わないだろ？ 現実的な戦術じゃない。」

へふむ… では君らに問うが、我々が自軍艦の横にいる敵軍艦を攻撃するのに特殊弾頭兵器の使用を躊躇うと思うかね？

………

へこれはそういうことだ。シミュレータでの戦闘は決して”ただの仮想戦闘”では無い。く

「それは無茶が過ぎるだろ。あんたらにだって、『自我』があるじゃないか。」

へあいにくと、我々の持つ自我は”意思”や”感情”に左右されるものではないのでね。所詮は、ヘッドより与えられし仮初のもの…

もし君らから意思を持つように見えているのであれば… そう見えるだけの”設定”に過ぎんよ。く

「そういうもんかねえ…。」

やはり、彼女らには我々に関する最低限の知識がインプットされているものの、思考傾向には他次元存在にありがちな隔たりがある。最たる証拠に、綾波は今一番に知りたがっていた疑問を投げかけてきた。

「そもそも… ”鋼鉄”ってなんなのですか？」

へふむ… 少々長話となってしまうが、かまわんかね？

………

………

………

真実として、鋼鉄「クロガネ」という名称が使われだした確かな理由は分からん。

ただ明確なのは、それが我々という兵器の始動点…… 第1世代期には既に存在し、成立していたということだ。

我々の『祖』、1つの世界に革新をもたらした超兵器技術は大まかに3つへ分類される。

全ての始まり…… 俺や零式―荒覇吐、テュランヌス等によつてその“力”を示した、「第1世代期」

あらゆる面において、過去の世代から技術の解析を進め、“真の脅威”を生み出した、「第2世代期」

進化の末に、暴虐と破滅を目覚めさせた、「新世代期」

：いずれにせよ、その超兵器技術とともに鋼鉄「クロガネ」という存在もそれぞれの時代において運命であるかの如く存在していた。

初めは、支配の力から人々を解放した英雄達をして、それを称賛するような意味で存在していたと思われていた。

だが、時代が変わればその意味も見方もまるつきり変わってしまった。

”兵器という強大な力さえ超える存在”…… いつしか、鋼鉄「クロガネ」は”世界の脅威になりえる力を持った存在”としての認識が広まってしまっていた。

事実、第2世代期には世界の解放に尽力した「第零遊撃部隊」も、新世代期に力による支配からの独立を掲げて戦ってきた「南極独立化中立国家」も、鋼鉄「クロガネ」という”力の象徴”がいたからこそ”

世界の敵”として認識され、戦火の中へと踏み込んで行かざるを得なかった。

生ける存在も、命を持たぬ凶器も…… 等しく、”力があれば鋼鉄”だ。

我々はヘツドの矛となり盾となる鋼鉄として、今日に至るまで戦争を続けてきた。

鋼鉄という唯一無二の称号ある限り、我々はヘツド・「アレス」の下…… 全ての障害をねじ伏せる未来への脅威として立ちふさがらうだろう。

それが、我々…… 鋼鉄「クロガネ」という存在なのだよ。

…

…

…

↳ 極南基地 端末ルーム

〈おや……？ 貴方は確か、蒼龍でしたか。〉

「グロース・シュトラール殿？ 何をなさっているのです？」

〈私はセイレーンについてのレポートを…… あの存在は、非常に興味深いので。貴方はどのような用向きで？〉

”鋼鉄”という存在がどのようなものかについて少し…… グロース・シュトラール殿はご存知ですか？」

〈鋼鉄、ですか…… さて…… 実のところ私達にも、その真意は分から

ないのです。く

「分からない、ですか？」

「鋼鉄、というのは強力な力を持つ存在を指してそう呼ぶ場合が大半ですが、その範疇は『人間』から我々のような『兵器』にいたるまでに幅広い。確かに、その時代において我々と並ぶ力を持った人間は実在していました。く」

第1世代期は、解放軍で唯一無二のエース「ブラッド・フォン」

第2世代期は、第零遊撃部隊に所属した伝説にして不敗の英雄「ゼロ」

新世代期は、南極独立国家の奇才「レイジ・ギアード」

その他にもナーウイシアの「アイフ・コーズ」、ウイルキアの「ライナルト・シユルツ」と…

「いずれの者達も、我々の戦闘スペックに匹敵する…。いえ、それ以上とも言える能力を有していました。正しく、彼らは『鋼鉄』と呼ばれるに相応しい存在でしょう。しかしながら、『鋼鉄』は彼らのみを指してそう呼ぶわけでもない。実に難しい解釈ですが、実に面白い、そう思うでしょう？く」

「なるほど…？ 参考にはなりました。」

「へまあ、長々と話しておいてなんですが…。その意味は自然と分かるかと。なぜなら、貴方も既にその『鋼鉄』の一員として我々と共に在るのですからね。く」

「聞きたかったんだけどさ…」

あの時言ってた『鋼鉄』ってのはど

ういう意味なの？」

「『鋼鉄』の意味だ…？ 特に深い意味があって使ってるわけじゃねえよ。」

「ふーん…。」

「俺らがそう”呼んでるだけ”の俗称ってどこか？ …まあ、強いて言うなら…。」

『ゲームのプレイヤー』だ。」

「プレイヤー…？」

「いつかは分かるさ。さて、そろそろ出るか。」

「もう大丈夫なの？」

「やはり、現状じゃ手持ちの情報だけでセイレーンに対する効果的対処を検証するのは時間が掛かり過ぎる。手っ取り早く奴らに関する情報を端末なり何なりから抜き出してくるのが楽だろうな。」

「…ってことは…。」

「直接殴り込んで奪うまでだ。」

A—9・吹き荒れし猛威

↳鏡面海域

シチリア島・南部域

〈「グロー・ヘッド」へ「ホットロッド」より通達、外のセイレーン連中は粗方片付きましたぜ。〉

『了解した。これより、基地内部の制圧に掛かる。お前は、引き続き外部の警戒をしろ。』

〈了解。……しかし、気に食わねえ…… これも『再現』とかいうヤツの一部とでも言うつもりか？

偶然にしちやあ、出来過ぎだぞ……〉

—部隊オーダー—

・アレス | F/A—49

・蒼龍, 綾波, U—96

・シュトゥルムヴェイント

・[BB] イリノイ級 x 5

・[CV] 改ニミッツ級 x 5

・[CA] 改タイコンデロガ級 x 20

・[DD] Z99級 x 60

舞台は再び、鏡面海域の中へと移った。

場所はザディアの御膝元…… いや、こちら側ではイタリアのシチリア島の位置にあたるエリアとなる。

セイレーンの更なる情報を求め『穴』へ再侵入したテュランヌス部隊が辿り着いたのが此処である。

どうやら、セイレーン部隊はシチリア島の一角を攻撃要塞として固め、その更に南のマルタ島に巨大な基地を構築しているらしい。

アレスは、基地にあると思われるセイレーンの情報を得るため、こ

の鏡面海域の制御の奪取に取り掛かった。

すなわち、速攻でセイレーン部隊への強襲を仕掛けたのである。

海域には何故か駆逐艦型のエンフォーサータイプが居たが、開幕特攻したアレスが繰る「ホワイトソード」によって速攻で蜂の巣にされ没した。

しかも、そいつが鏡面海域の制御を担っていたらしく、鏡面海域の制御自体はあっさりとアレスの手中となった。

残ったのは、大本の制御を失った海上のセイレーン戦力のみ。

こうなってしまうえば、後は通常艦部隊に処理を任せて問題無いだろう。

というわけで、寝返り電波砲で制御を奪った量産艦以外のセイレーン勢力はシュトゥルムヴァイントらによってほぼ全て破壊された。

今回、本格的に使用した寝返り電波砲だが：：　セイレーンの制御下に無いA・I艦に対しては有効であることが既に実証済みなため、今後の戦闘においては使用頻度は多くなるだろう。やはり、使える手駒は多いに越したことはない。

しかし、そんな戦勝ムードが厚い部隊の中でシュトゥルムヴァイントだけはこの”状況”が気に入らない、といった反応である。

いや：：　正確にはこの”鏡面海域”自体が忌避すべき対象である。

テュランヌスにおいては当たり前の事だが、各超兵器に搭載されているA・Iには過去存在するほぼ全ての戦闘におけるデータが蓄積されている。それこそ、どこで戦い、どこで没したかにいたるまで事細かくである。

シュトゥルムヴァイントにとってシチリア島の近海域とは、「シュトゥルムヴァイント」として、第2世代の超兵器として最初の敗北を喫した”最悪の因縁の場所”である。

それがこの鏡面海域という最初の作戦行動域としてやって来たわけだから、作為的なものと見ない方がおかしい。

……もしもだ。ヘッドも薄々考えてはいた。
この事が、考えうる上で”最もあり得ない”可能性を指し示している
とすれば…

「セイレーン」ってのは、一体なんだ…？

く鏡面海域

マルタ島―大型セイレーン基地

場所は変わってマルタ島のセイレーン基地、”こちら”の世界でマルタ島なのかはさておき…

ここには、アレスに他は一応の護衛役として綾波とU―96、主戦
力として機兵部隊が攻略に入っている。

海上や上空に強力な戦力が揃っているのに対し、地上ともなると地
形的にも投入できる戦力は限られてくる。

無論、不可能かと言われるればそうでもなく、地盤に問題が無ければ
陸上戦艦ごと空輸してくるというアホみたいなやり方も採れる。

だが実際にはそんなの無駄の極みなため、この島のような局所攻略
には機兵で構成した部隊を使うのが基本戦術である。

時間は掛かるが確実な手段だ。

…だが、それを座して待つているほど悠長ではないのがこの男であ
る。

機兵部隊に指示を送ると、我先にと基地内部へ突っ込んで行ってし
まった。

当然彼1人にして置くわけにはいかないため、綾波・U―96も艀
装を仮展開して後に続いた。

基地自体の制御は鏡面海域のものとは別になっているのか、内部の

セキュリティティなどはまだ生きていた。

侵入者を阻まんと、各所から自律兵器やらトラップやらが襲い掛かる。

しかし、兵器にしてもレーザートラップにしても……この男に対しては全てが無意味である。

「セイツー！ フツ！！ ハツ！！」

超高速で通路内を縦横無尽に飛び回りながら手に構えたニンジャロッドで次々とセキュリティメカを斬り裂く様は、誰がどう見ても忍者そのものである。

その速さたるや、綾波らが艤装装着状態で追いつけるかどうかというところ。

彼女達の方からすれば、見失わないように後について行くのがやつとである。

まあ、アレスが通った箇所はマッピングされるため、位置が分からなくなるということは無いが。

セキュリティティのほぼ全てが制圧し終わった頃、気がつけばアレスに追いついた時にはセイレーン基地のコンソールルームと思わしき場所に来ていた。

既にアレスは、端末類の精査を始めていた。

「ここが端末の制御室か…… この端末は使えそうかい？」

「……駄目だな。おそらく、電力が供給されていない。」

使えないことは無いが、今のままでは無理らしい。

そう判断するや、途端にアレスは周囲を見回し始めた。

視覚オプシジョンとして搭載されているオーグメントビジョンによる走査だ。

壁越しにあるエネルギーの痕跡なども、これを使えば容易にたどれる。

「……か。」

床のある一点に着目したアレスは、そこに右手を当てるとパルムレーザーの出力を器用に抑えながら焼き切った。

内部が露出すると、素人目では絶対に分からないレベルで配線がびっしり詰まっているのが目に入ってくる。

「チツ：： やっぱ、根元の配線がイカれてるくさいな。」

アレスは即座に中型の箱のような物を転送すると、配線を弄りだした。

転送したのは、比較的小型かつ高出力を実現したモバイルバッテリーである。

エレクトロンレーザーの運用に必要なエネルギーも余裕で賄える。あまりに手際が良かった為、U-96は物凄く感心したように見えた。

「：何か言いたいことでもあるのか？」

「いや：：？ 意外にもヒッパーみたいな機械いじりが得意なんだな、と思つてさ。」

「聞き捨てならねえな。『ヒッパー』がどういう奴かはさせておき、俺は電気工学・電子工学専攻だ。」

そうこうしている内に、中央の大型端末が起動する。どうやら、対処はうまくいったようだ。

すかさず、端末の前に立って何やら色々と操作をする。

「厄介なプロテクトが掛かってやがる。」

「解析不可能なレベルか？」

「暗号アルゴリズム自体は問題じゃない。問題なのは、その数だ。」

「〈グロー・ヘッド〉、鏡面海域内に新たな侵入者を確認。〈

「こちらでも確認している。：30分だ、それだけあれば十分、いけるか？」

「へわけもないですね、時間稼ぎはお手の物つてね。〈

…

…

……

↳ 鏡面海域

シチリア島・テイレニア海方面

「全員、異常は無いか？」

「今のところ変わった様子は無いみたい。指揮官は大丈夫？」

『こちらにも特に問題は無い。早速だが、偵察を開始してくれ。』

「了解した、向こうの陸地に煙が上がっているな。何かがあるかもしれない、そこから調べてみよう。」

〈面倒な連中が来やがったぜ… さて、どうするか？〉

向こうの連中はこちらが配置しておいたセイレーン艦を撃破しつつ向かってくる。

確実に、人類側の勢力であるのは間違いない。

この時点での戦力評価としては… 『駒』の戦闘データよりは上であるのは確定している。

しかしながら、KAN—SENという存在の戦術データサンプルがまだ少ないということを加味すると、その評価は未知数。

もうすぐ、シチリア島に接近されてしまう。

〈直接確かめるつきやねえわな。〉

「今のでセイレーンも粗方片付いたな。」

「けど、なんだかおかしくなかった？ やけに、統率された配置だったような…」

「!! 指揮官、前方に… 戦、艦？ とにかく、巨大な船が接近してくるわ!!」

「これは一体… 既存の量産艦でもこのサイズは見たことが無いぞ

！」

『これは、いやまさか…？』

シチリア島の裏側から巨艦が姿を見せる。

おおよそ、本当に動いているのが信じられない程の巨体が、確かに目の前に現れた。

その馬鹿デカさから想像もつかない構造だが、快速の巡洋艦ほどの速度を出しながら大型の主砲がこちらを睨む。

どうやら、あちらは既に臨戦態勢の様だ。

「その大型艦!! こちらは、現在アズールレーン・ユニオン構成軍配下に入っている、特務混成部隊「NO—NAMEs」所属のエンタープライズ!! 対話する意思があるなら、応答を求む!!!」

へエンタープライズ、ねえ… とりあえず、お前らに話すことは何も無えな。これから死ぬ奴らに、言ったところで無駄だろうよお?」

無機質にも聞こえる巨大艦からの無線内容は、一方的なまでの抹殺宣告だった。

間髪入れずに、こちらの声を遮るかのように巨艦は轟砲を響かせる。

へ見せてもらうぜ、世界を救う力… 「KAN—SEN」の持つ性能ってヤツをよおツ!!!」

… 戦場の風”が吹く…

A-110. カオス・ロワイアル

〜数週間前

アズールレーン・ユニオン部隊支部

『……ふう、それで？ 零次君、君は先程の映像を見せて我々にどうしろというのだ？』

「中将殿、並びに将校のお歴々にはもうお分かりかと思いますが：奴らは”セイレーンに対して攻撃”していました。そして、我々がこれまで目にしたことが無い”巨大な艦”，”未知の高度な技術”……」

『じゃあ何か？ あの南極海で確認された”不明艦”然り、セイレーンに次ぎ”新たな脅威”だと？ 馬鹿馬鹿しい!!』

『そもそも、君も言っていたようにそれは鏡面海域内で確認されたことなのだろう？ あの不明艦についてはともかく……このような映像だけで事を主張されて、「はい、そうですね」とは言えんよ。』

「しかしッ!!」

『……まあ、他の方々の言い分も分かります。』

「……ハリックス大将……」

『セイレーンとの大規模戦も間近…… レッドアクシズとの一時的な共同戦協定にも漕ぎつけて、ようやくのスタートラインです。そんな時に、このような事態が起こってしまったのは皆が混乱してしまうのも当然というもの…… 今更、戦線に穴を空けるわけにもいきません。』

そこでどうでしょう？ この件については、境大佐に一任するとしてこれらの調査を行わせるというのは。』

『むう……』

『以前の南極海の調査以降でしたか？ 各地の海域にチラホラと未確認の鏡面海域が発見されだしたのは。おそらく、この件に関係があるものと思われれます。まずは、これの調査を開始するのが賢明ではないでしょうか……？』

『うむ…… 致し方あるまい、それで行こう。境 零次大佐、並びに

特務混成部隊はこの調査を開始されたし!! この任務における全権は君に委任する!!』

『ウーフ大将殿?!』

「…はっ、了解致しました。」

『そういうことです。各々方も作戦の調整に向けて”やるべき事”が多いでしょう。ここはひとまず、解散ということでは…』

『…つく! 今回は、例外だぞ!!!』

『…では、我々も解散ということでは…』

……

……

…

「ハリックス大将、申し訳ありません。貴方の手を煩わせてしまいました…」

『構わんさこれくらい… それに、これから大変なのは君の方だ。なかなかの重責を押し付ける形になって、すまない。』

「いえ、それに関しては自分も望むところです。気になることもあるので。」

『そう言ってくれど助かる。で、早速だが君に調査を頼みたい。場所は……』

任務を受けたのが約1週間前のことだ。この件に関しては、今回の

出撃に俺も同行することになった。

一部のKAN—SENはこの事に対し強く反対の意を示していたが、最終的に俺が無理やり通した。

彼女達には悪いことをしたが、流石にこの件を彼女達だけに背負わせるには荷が重過ぎる。

だからこそ細心の注意を払い、指揮艦にも装甲重視の戦艦を採用した。

今回は、場所が場所だけに厄介だというのもある。

件の鏡面海域はザディア領に面した陸地の一角にあるという…

これだけでも、ザディア或いはレッドアクシズ側から何かしらの対応があってもおかしくない。

：しかし、当初の予想とは裏腹にザディア側はこちらへ何らかの接触を仕掛けてくるどころか、あつさりはこちらの侵入を許した。レッドアクシズからの妨害も何も無い。

上の連中が何らかの形で介入でもしたのだろうか… それとも、ザディア並びにレッドアクシズには何らかの考えあつての静観か…

結局、何の妨害もないままに俺達は鏡面海域の中へと突入した。

今にして思えば、全てはこの事態を予見していたからだろうか…

へお前らに話すことは何も無え。これから死ぬ奴らに、言ったところで無駄だろ。く

目の前に荘厳とそびえ立つ巨城が如く、巨大戦艦は砲煙が上がると共に咆える。

対峙して、今でこそはつきりと分かる…

へ見せてもらうぜ、「KAN—SEN」の持つ性能ってヤツを!! 冥府への手向けに俺の”名”を持っていけ!

戦火の暴威…

超兵器「シユトウルムヴェイント」!!! 戦闘開始ッ

!!
∨

こいつは・・・”危険”だ・・・!

／
／
／
／
／
／
／
／
／
／
／
／
／
／
／

超高速巡洋戦艦「シュトゥルムヴィント」 接近!
!
!

『…!? 全艦、回避急げえッ!!』

零次の怒号によって、それまで待機していたKAN—SEN達は反射的に回避行動を取った。

次の瞬間には、つい先ほどまで立っていた場所に数本の巨大な水柱が上がる。

：先手を取ったのはシュトゥルムヴィントだった。

まだこちらのサウスダコタの主砲射程外にもかかわらず、ほぼ正確にこちらの場所へ奴の主砲は着弾した。

不確かだが、この距離からでも異常なほどと分かる長砲身ゆえの射程距離なのか…

…であれば、この状況は非常にまずい!!

『クリーブランド、皆を連れて奴に接近だ！ サウスダコタも後に続く形で、航空機隊を護衛につける。リスクはあるが、あのまま撃ち放題にさせるわけにはいかない!!』

「了解！ みんな、私に続けッ!!」

クリーブランドを先頭に、足の速さでもって零次の部隊が詰めて掛かる。

近づくことでよりあのシュトゥルムヴィントなる奴の直撃弾を受ける危険性は高まるが、”近づけさえ”すれば強力な雷撃の前に戦艦

は成す術もない。

……そう、これが『通常の戦艦』であつたなら最も合理的かつ模範的
的判断と言えるかもしれない。

問題は、その相手が合理も模範も意に介さずはね除ける”超兵器”
であることの一点である。

「俺と足を競うつもりか？ いいぜ、追いつけるもんなら付いて来て
みやがれ!!!」

「敵が動く… ツて、なっ!？」

「ちよつと!! どういうことよ!? 戦艦が出せる速度じゃないでしょ
!？」

「へはっ！ 負け惜しみはあの世で言うんだな!!」

シュトウルムヴィントとしては、相手側の反応は予想通りである。

今の今まで、敵の意表を突く為とはいえシュトウルムヴィントは”

巡航速度以下”の速力で零次の部隊に接近していたのだから…

それがいきなり、駆逐艦の快速が霞んで見える程の超高速で動き出
したんなら、尚の事その事実混乱に混乱しないわけがない。

これは、指揮官たる零次にとつても予想外のことだ。

当初、あのシュトウルムヴィントを仕留める為の策が最早なんの意
味も無くなつてしまった。

みるみるうちに離されていく彼我距離を見ればそれは明らか、こち
らがどんなに追いつがろうとしてもあの常識外れの速力の前には太
刀打ちできない…!

さらに悪いことに…

「あれ見て！ あいつの後ろから何か来る…!」

「あれは…?」

シュトウルムヴィントの後部甲板から飛翔体が1つ、こちらに向
かって飛んで来る。

KAN—SEN達は、一瞬それが何だか分からなかったが、多くの
戦場を経験した零次にとつてはそれがなんであるかは一目瞭然だっ

た。

『ミサイル!? 前衛部隊反転ツ!! 何としても叩き落すんだ!!』

零次の対応は早かった。

ミサイルの脅威を理解しているなら、あれの危険性は主砲の比じゃない。

特に、装甲の薄い駆逐艦、軽巡洋艦に対しては致命的だ。

当然のこと、生半可な対空性で落とせるほどに甘い代物ではないが…

「ここはやらせない…!」

「当たれ☆」

そこはKAN—SENの力でカバーする! クリーブランド級とアトランタ級の対空性能なら、多少強引にでも落とせる!!

直前に迫っていた弾頭は、分厚い対空砲火の前に破碎する。

狙い通りにミサイルの処理は成功した。

「よし、このままあいつを…」

〈余所見はいけねえな。〉

「っんな!」

だがそんな上に気を取られている隙を、シュトゥルムヴェイントが見逃す筈が無い。

いつの間にか超至近距離にまで接近したシュトゥルムヴェイントは、高速で反転すると同時に魚雷をばら撒く。

厄介な事に、酸素魚雷と誘導魚雷の複合雷撃である。

そして、距離を離せば再び主砲とミサイルによる攻撃…

上は砲弾とミサイル、下は魚雷、捌ききれなければ阿鼻叫喚の地獄
絵図は避けられない…!

一方でシュトゥルムヴェイントは完全優位なのかと言われれば、そういう訳にもいかず…

へチイツ!! 奴ら一体何機抱えてやがんだ…!! 落としてもキリが

ねえ!!」

エンタープライズとサラトガの航空機隊に追い回されている状況である。

一応シュトゥルムヴィントに対空手段が無い訳ではないが、お世辞にもヴィント級は超兵器群の中で対空性能は高くない。

味方の支援もシュトゥルムヴィント自ら断っている以上、援護は見込めないし認められない。

なら、おのずと対処法は絞られる。

「狙い目はあの”戦艦”だな。」

シュトゥルムヴィントの標的となったのは、部隊の中で唯一の量産艦…

すなわち、”指揮艦”一択である。

本当は、空母KAN—SENを狙えば済む話だろうが…

「その首、貫うぞ人間!!!」

『何っ!?!』

「しまった!! 間に合えッ!!」

連中がああ艦を中心に部隊を展開している点からも、司令塔として機能していることは分かりきったこと。

奴が積極的に狙われるなら、KAN—SENは当然無視できない筈だ。

事実、その通りに向こうの空母はシュトゥルムヴィントの雷撃を庇うようにして盾になり…

全ての魚雷はエンタープライズに直撃した。

『エンタープライズ!?! くそっ!!』

「まずはーっ… ん?」

エンタープライズは…

「っ…! まだ…」

「何っ!?! 無傷!?!」

沈んではいなかった…!! そして、反転するシュトゥルムヴィントに向け艦装を構える。

「これで… ” 終わり” だ!!!」

渾身の爆撃機がシュトゥルムヴィントに向けて飛翔する。

〈ちくしょう…!!〉

シュトゥルムヴィントも振り切ろうとするが、如何せん雷撃距離にまで近づいたのが仇となった。

激しい爆音と共にシュトゥルムヴィントに炎が上がる。

〈ぬおおおおお ! ! ! ! !〉

巨大艦を覆うほどの凄まじい黒煙が辺りを漂う。

敵の姿は確認できないが…

「やった… やったよ!! エンタープライズ、あいつを倒した!!」

「ああ、これで、何とか…」

〈やってくれるじゃねえか、おい。〉

「ッ!!」

だが、無情にもそこには未だに健在のシュトゥルムヴィントが姿を見せた。

〈機関は損傷したが、お前らを仕留めるには十分だ。こいつで止めだ、エンタープライズ!!〉

「ここまでか…!」

奴の主砲が、ゆっくりと狙いを定めた。

最早これまでか…? ?

『前の借りを返すぞ! 「テュランヌス」の手先イ!!』

〈何だどつ、裏から!!? ぐっはああ!!?〉

猛烈な光を伴ってシュトゥルムヴィントを爆炎が襲う。

横槍を入れてきたのは、なんとピュリファイアーだった。

〈くっそがああああ…! ! ! ! !〉

『あつははははは!!! ざまあみろ!! 目の前の奴に気を取られてるからそうなるんだよ!』

当然、彼女の狙いはエンタープライズ達への介入などではなく、前回燃やされた件に関してのリベンジである。

ピュリファイアーからもらった至近距離の高出力レーザーの深刻なダメージにより、シュトウルムヴィントの耐久は限界に達した。

「くっ…」

『情けない姿だね、エンタープライズ。ちょうどいいや、此処であんたも処分してやるよ。その後で、指揮官も一緒にね。ついでに、お間拔けな「テュランヌス」のリーダーもな!!』

へ全くだ。お前みてえな奴に不覚を取るなんざ、情けないにも程がある。く

『はっ?』

そう、そのすぐ直後である。

ピュリファイアーの砲がエンタープライズ達へと向けられる中…通信に割り込んできたのは、つい先ほどまで回線から聞こえていた声とまったく同じ奴の通信だ。

その発信源の存在はすぐ明らかになった。

なんせ、先程沈んだ筈の大型艦が陸の影から 3隻も現れたからだ。

そして先のお返しと言わんばかりの主砲による豪雨が容赦なくピュリファイアーに襲った。

『アアア、クッソ、なんでまた私があああ!!』

回避は間に合わず、哀れピュリファイアーはまたしても爆発四散した。

へやれやれだ、イレギュラーのせいで予備も投入することになるなんてな…く

さて、状況は依然として最悪…

ピュリファイアーによってシュトウルムヴィントを撃破したかと思いきや、まさかまったく同じ巨大艦が同時に3隻も出て来るとは…

しかし、やはりシュトウルムヴィントはピュリファイアーに対して攻撃していた。

奴はセイレーンと”敵対”している… 加えて、先程彼女が言っていた「テュランヌス」という単語から組織として動いている存在である可能性が高い。

こうなると、はつきりさせておかなければならない…！

『お前らは何者だ!? セイレーンと敵対している一点においては、俺達と目的は同じじゃないのか!!』

へしつこい奴らだぜ。さっさと止めを…

『…タイムオーバーだ、「ホットロッド」。帰還準備だ。』

へ……！ ……了解……

そこへ割って入るように巨大艦を制したのは、白銀の翼を持つ異形の航空機に乗った奴だった。

なんだあいつ!? …とクリーブランドはかなり困惑の声を上げていたが無理もない。

その男… アレスの見た目からしてみれば黒一色の戦闘スーツにフルフェイスマスクという怪しさの塊である。

上空に滞空した航空機から身を乗り出し、立ち上がったその男は零次の部隊が使う回線に無理やり割り込んできた。

『本来、俺が出て来る予定は無かったが、要らぬ勘違いをされても面倒だからな。あのお喋りセイレーンがこちらの事を漏らした以上、組織としての隠蔽にもう意味は無い。』

『お前ら… いったい…』

『我々は「テュランヌス」。人類への”敵対者”だ。』

その数分後、鏡面海域の崩壊が始まり双方は海域を後にした。
零次達にとっては、正に奇跡的な生還となった。

あれだけの危険な相手と相対して、消失戦力が無かったのはそう言う他にない。

『映像はしつかり収めたな…？』

『ぼっちり撮れてる… これから帰還するよ。ふへへ…』

『作戦完了。本国に帰還するよ。』

『ご苦労様… ” 貴重な参考資料 ” となるわ、確実に持ち帰るように。』

『了解…』

この件により、「テュランヌス」という存在は完全にあちらの世界へ露見した。

セイレーンともまた異なる系統の新技术… 新たな波紋が伝播するの、時間の問題だった…

—
—
—

…

…

…

《目ぼしい収穫はあったか？》

『……セイレーンの存在、甘く見過ぎていたかもしれない…』

鏡面海域、そしてあの”記録”… 既に奴らの手の内にあるとす

れば…
どうやら… ”真相”を明かす必要があるな。』